

41730

教科書文庫

4

810

41-1931

200030

2039

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

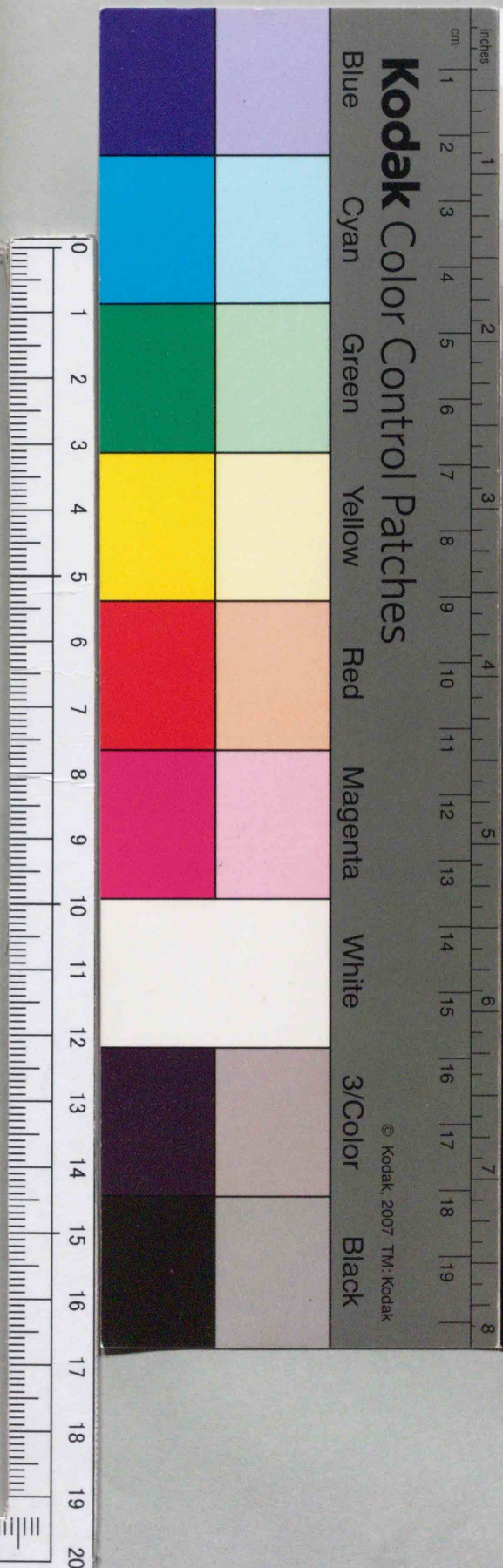


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



見本中等教科書協會

3759
Y019
資料室

中國文教科書

中學

一卷



東京

光風館藏版



貴州科學樓

資料室

3759
Y019

文部省檢定

中華民國二十六年二月二十二日 中國學校國語文教科用

吉田彌平編

中國文教科書

卷一

東京 光風館藏版



例言

本書は改定の中學校教授要目に據り、中學校國語科の講讀用教科書として編纂したものであります。

本書は現代文を經とし、各時代の代表的文學を緯とし、専ら生徒の學習能力を基準としてそれに適應するやうに組織しました。

地圖・繪畫寫眞などで本文の理會に必要なものは成るべく挿入しました。肖像や筆蹟なども賢哲名流の倂を偲ぶよすがになるものはつとめて取入れました。

諸家にはそれ〴〵諸家独自の文體あり、苟もこれに手を觸れてはならないことは申すまでもありませんが、本書の性質上まことに已むを得ざる場合に於て多少の手を加へることについて賜はり

ました諸家の雅懐に對しては、特に感謝の意を表する次第であります。

昭和六年八月

中學國文教科書卷一

目次

| | | | |
|---|-------|------|----|
| 一 | 清淨の國 | 石井國次 | 一 |
| 二 | 菊の香 | 加藤武雄 | 四 |
| 三 | 三本の杉 | 西條八十 | 七 |
| 四 | 一本橋 | 河井醉茗 | 一〇 |
| | 親牛子牛 | 野口雨情 | 三 |
| | いなご | | |
| | 猿の猿眞似 | | |

目次

一

| | | |
|----|-------|---------|
| 五 | 菖蒲の節句 | 島崎藤村 三 |
| | 東照公 | 中村栗園 七 |
| 六 | 此の一戦 | 小笠原長生 六 |
| 七 | 筍 | 薄田泣菫 三 |
| 八 | 童心 | 北原白秋 四 |
| 九 | 競漕 | 久米正雄 四 |
| 一〇 | 洋上の夕照 | 水谷まさる 五 |
| 一一 | 比叡の鳥 | 高濱虚子 五 |
| 一二 | 安井息軒 | 森 鷗外 七 |
| | 三計塾ノ記 | 安井息軒 七 |
| 一三 | 鐵棒 | 櫻井忠温 六 |

| | | |
|----|-----------|-----------|
| 一四 | 吾が輩の運動 | 夏目漱石 八 |
| 一五 | スポーツマンシップ | 謙信ノ義勇 一〇三 |
| | 弓箭ノ争 | 頼 山陽 一〇三 |
| | 好敵手 | 相馬御風 一〇四 |
| 一六 | 田家の朝 | 萩原井泉水 二五 |
| 一七 | 明月の影 | 齋藤竹堂 二六 |
| 一八 | 富士登山 | 河井醉茗 二七 |
| | 田子浦 | 阿部次郎 二九 |
| 一九 | 山の歡喜 | |
| 二〇 | 月見草 | |

| | | | |
|----|---------------|-------|-----|
| 二一 | 兜蟲 | 吉村冬彦 | 一四三 |
| 二二 | 水の都 | 大類 伸 | 一四七 |
| 二三 | ベッカストリニ | 松村武雄 | 一五四 |
| 二四 | 湖畔の秋 | 田山花袋 | 一七〇 |
| 二五 | 月の天橋 | 徳富健次郎 | 一七六 |
| 二六 | 明治天皇の御遺物を拜観して | 笠井信一 | 一八四 |

目

次終

中學國文教科書卷一

一 清淨の國

我が國は清淨の國である。我が國民は一般に清淨の美を愛する。その心が清淨である、その衣、その食、その家が、いづれも清淨である、その國全體が清淨である。清淨の美を解せぬものは、到底日本を解することは出來ない。

敷島の 大和心を人間はば

朝日ににほふ山櫻花

敷島の
本居宣長の歌

この歌が一般國民に愛誦されるのは、國民精神の清美を歌つてゐるからである。一體朝は一日の中で最も清々しい時である。空にいさゝかの曇もない朝、東天に朝日の輝き出るさまは、實に清々しい。その清らかな光に、櫻花の中の粹たる山櫻が、ばつと映りあつてゐるのは、なほ更に清々しい。これぞ大和魂の本體である。されば大和魂は清淨の粹であるといふことが出来る。

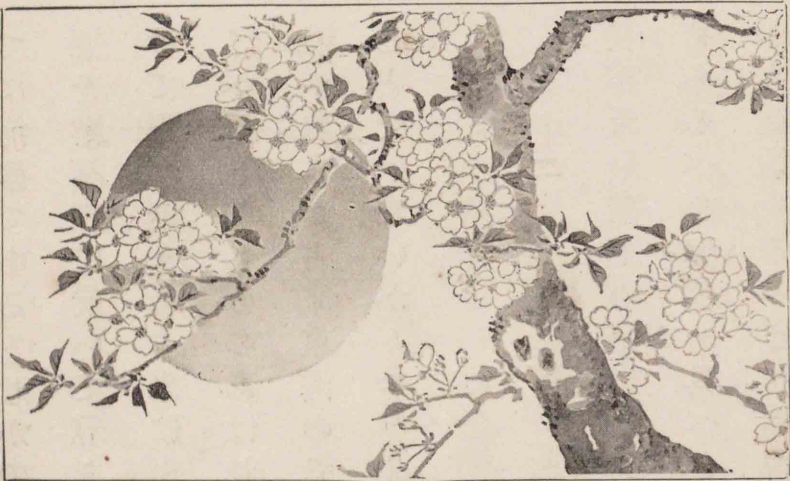
田子の浦ゆ

山部赤人の歌

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ

富士のたかねに雪は降りける

緑の波が靜かで、海の面が、さながら鏡のやうな田子の浦、そのあなたに、どこから見ても形の變らない日本一の靈山が



旭中
田に
雲
櫻筆

玲瓏として天をさゝげて立つてゐるのは、なんと清淨の極みではないか。此の歌が名歌として世にもてはやされるのも、つまり、此の美の琴線に觸れてゐるからである。
滄海の中に在つて、山青く水清き我が日本は、土地そのものが、すでに清淨である。開闢以來未だ曾て外國に汚されたことのない我が三千年の歴史が、す

でに清淨である。しかのみならず、我が國民は、善を好んで惡を憎み、正に就いて邪を排し、直を愛して曲を嫌ひ、弱を扶けて強を挫き、よく忠に、よく孝に、よく義に、よく勇に、風流をさへ解して、もののあはれを知つてゐる清淨な國民である。我が日本が古來東海の君子國と呼ばれて來たのも、尤もなことはないか。(天町桂月の文に據る)

二 菊の香

石井國次

我が天皇陛下の允文允武におはしまして、萬民の上に君臨せらるべき聖徳を具へさせ給ふことは申すも畏きことながら、御幼少のみぎり、學習院御在學中の御事どもを拜し奉

石井國次
教育家
學習院教授
明治七年茨城縣
下妻町生

るにつけても、まことに感佩に堪へぬことが多いのであります。

まづ第一に驚嘆し奉るは、御記憶の拔群にあらせられることとであります。私は今まで多くの學生に接して参りましたが、陛下のやうに御記憶の強いお方は御見受け申したことがありません。蟲の名でも、貝の名でも、聯絡も系統も無い事まで、一度御覚えになつた以上は、決して御忘れになるといふことはありません。

かく御記憶の拔群な上に、御研究心が非常にお強く、何でもいゝ加減にして置かれる事が御嫌で、詳細に御質問になり、又御自身徹底的に御研究になるのであります。例へば歴

史で聖徳太子の御事蹟を申し上げると、御歸になつて参考

書を御調べになり、聖徳太子の

憲法とはどんなものか、三寶と

はどういふ事かと御研究にな

る。理科で蝶の御話を申し上げ

げると、蝶類圖説を御調べにな

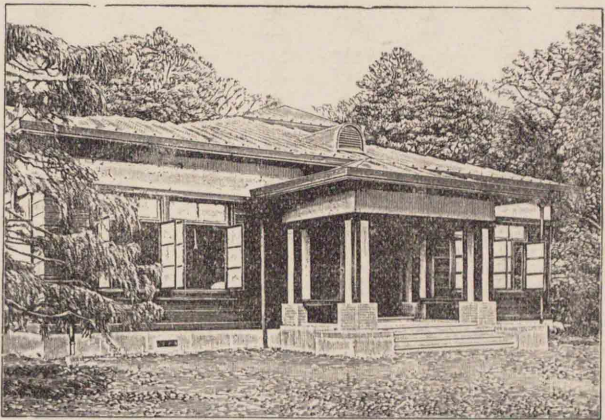
つたり、盛に御採集になつたり

して、日本産の蝶は勿論、外國産

のものまでも御観察になる。

電氣の御話を申し上げれば、種々の器械を御取寄せになつ

て御實驗遊ばされ、無線電信電話の事まですつかり御理解



生 物 學 御 研 究 所

三寶
佛法僧
聖徳太子の憲法
の第二條に「篤
く三寶を敬へ」
とある

明治神宮
明治天皇昭憲皇
太后を奉祀する
神社
東京市外代々木
に鎮座

になるといふ風であります。旅行・登山の御趣味も御豊富
にあらせられ、單なる御運動としての外に、地圖や案内記を
よく御調べになり、其處の産物や動物・礦物から氣象の事ま
で熱心に御研究になる。萬事がかういふ風であらせられ
るから、御知識の確實で且深みがあらせられる事は、實に驚
嘆し奉る外はありません。

明治神宮に參拜して、明治天皇の日常御使用になつた御調
度品を拜觀した者は、誰でも其の御質素なのに感泣しない
ものは無いと思ひますが、陛下も亦其の御遺傳のためか、御
感化のためか、華美が御嫌であらせられます。それですか
ら、御學用品等も全く一般學生と同様な品を御使用になり、

鉛筆などは、當時一錢五厘の鷲印のを好んで御使用になりました。しかもそれがごく短くなるまで決して御棄になりません。消ゴムも當時四五錢位のもを、豆粒位になるまで御使用になり、雑記帳でも、半紙や畫用紙でも、少しもむだには遊ばしませんでした。それで、大正三年三月初等科を御卒業あらせられました時、御高德を一般兒童に拜せしめたならば國民教育に裨益する所があるだらうと考へて、陛下の御使用になつた背囊、教科書、雜誌、筆入から帳面、鉛筆、消ゴム、並に御製作になつた手工品、圖畫、標本等を拜借して一室に陳列し、御教室、御控室等すべてを公開して、一週間に互り、市内及び近縣の小學兒童に拜觀せしめたことがあります。

リボン
Ribbon

ます。その時、毎日何千といふ兒童が校長、教員につれられて参り、私共は手分けをして種々説明を致したのであります。たしか京橋か日本橋あたりの學校と思ひますが、女子でかなり綺麗な服装をして、幅の廣いリボンなどをつけて來た一組がありました。私が其の女生徒たちに説明をしてから、皆さんは、殿下でさへかやうに御質素であらせられる事を拜見したら、もう立派な着物だの、幅の廣いリボンだのを家庭でおねだりが出來ないでせうね」と申したら、たいそう感激して泣いた生徒が随分ありました。陛下は又非常に規律正しいことが御好きであらせられます。朝の御起床から御拜、御食事、御通學、御復習、御運動、御入

浴・御寢まで、實に規則正しい一日の御日課を御守りになつて、御變更になる事は容易にありませんでした。従つて色色の事を遊ばすにも、すべて規則正しい御計畫をお立てになつて、組織的に遊ばすといふ風であらせられます。陛下は又實に公平無私であらせられます。例へば、戦争ごつこをやつたあとで、私が其の審判や講評などを致します時、御自分の方に不利な事がお有りになつても、少しもお包みなく御申出になる。角力で、陛下が相手をお投げ遊ばされて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣づかなかつた少しの踏切などが御自分にお有りになると、私に踏切があつたから負です。」と御主張になる。審判者や行司が少しでも不

公平な判定をすると、非常に御嫌ひになる。仲間の者が、其の方が御都合がお宜しいではございませんか。」などと申し上げると、そんな不正直な事はいけない。」と仰せになる。従つて、歴史上の事柄を御批判遊ばされる時など、實に理路井然、公明正大で、よく大局から斷案をお下しになる。實に陛下の御心は少しの曇もない明鏡であらせられます。それゆゑ陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりと顯れて、隠すことは出來ないのであります。陛下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば御口數の少ない方で、餘計なことは仰せられないが、誠に思ひやり深くあらせられます。従つて御幼少の時分から、普通の子供

に有りがちな、友達にからかふとか、意地悪い事をするとかいふやうなことは決してお有りになりませんでした。そして御學友に對しても、御側の者に對しても、好き嫌ひといふことが全くなく、一視同仁で、公平に御愛しになります。侍従や侍従武官などにも、新舊の差別なしに優しく御接しになるさうであります。しかも舊い人をいつまでも御忘れにならずに、元の侍女や御學友などが御伺ひ申しますと大層御喜びになりますし、時々御召もあります。私どもにもやはり其の通りで、御誕辰其の他の御祝のをりには御召があり、御機嫌伺に出ますれば、特別に拜謁を許され、御都合のお宜しい時は、御引止めになつて御言葉を賜ふのであ

ロンドン
Paris ^パリ London

ります。先年御外遊の御時には、私はロンドンやパリで御迎へ申し上げましたが、屢、御召を蒙つて御陪食を賜はり、内外諸名士の前でも、先生、先生と仰せられますので、覺えず無上の光榮に感泣した次第であります。人心がだんく荒んで、師恩を忘れるどころか、全くこれを念頭におかないやうな青年學生の多い今日、陛下のかやうな御態度は、實に貴い御模範ではありますまいか。

陛下の御盛徳を稱へ奉ることは、到底私どもの能くするところではありませんが、要するに陛下は御天性實に間然する所の無い御方で、現つ神としての神々しい御性格を先天的に御具へあそばしていらせられると申し奉るほかはあ

りません。(教育研究)

加藤武雄

文學者

明治二十一年神

奈川縣生

三 三本の杉

加藤武雄

數へ年の十五の春に、私は小學校を卒業した。卒業式が済んだあくる日に、卒業記念として、學校附屬の樹栽地へ、杉苗を植ゑに行つたことも、忘れ難い思出である。二十人ばかりの卒業生は、先生たちや村役場の吏員たちに率ゐられ、數千本の杉苗を車につけて、その山深い樹栽地へ出かけて行つたのであつた。山と山との間の溪流に沿うた谷間の小路を四軒近くもはひつたところ、そこに山裾の斜面を切開いて、私たちはその杉苗を植ゑつけたのであつた。私と一

番仲のよかつたKとTとの三人は、互に祝福しあひながら、殊に念入りに一本づつの苗を植ゑておいた。

「どんな事があつても、此の三本は枯れる事はないよ。」

「一番大きく、一番高く、——どうか、しつかり育つてくれ。」

「十年たつたら、三人で見に来ようよ。」

三人はこんな事を話しあつた。そして、手拭の端を切つて、そつとその根元に巻いておいた。KもTも、Y市の中學へ行くことになつてゐたが、私だけは、どうするともきまつてはゐなかつた。並べて植ゑた三本の杉の木、——その中でも、私の分だけは、無事に育ちさうもない氣がした。

漸く苗を植ゑてしまつた私たちは、もう日が暮れて、夕靄が

Y市
横浜市

あたりを立てこめる頃になつてから、山をおりて部落の方へ出て來た。仲の好かつた同志は三々五々打連れて、いろいろと話しながら、その溪流に沿うた山間の道を歩いた。薄暗く靄をこめた路傍の林で、ときどき小鳥の鳴く聲がした。

「さやうなら。」

「さやうなら。」

部落の方へ出ると、八年の長い間一緒に學んだ友人たちは、五六人づつ、二三人づつ、群を離れてそれづゝの家路へと別れて行つた。その「さやうなら。」がつまり私たちのお互の別れの言葉であると共に、又、私たち自身の少年時代への別れ

の言葉ではなかつたか。

「さやうなら。」

あの友だちの大部分とは、その時ろくろく顔を見合はさないで、唯この簡単な一語をかはして別れたまゝ、それきり一度も逢はないのである。――あの時別れて行つた友だちの後姿、それは「少年時代」そのものの後姿であつた。私は今でも、懐かしくそれを思ひ浮べる。その春の靄の中に永久に消えて行つてしまつた後姿を。(わが小畫板)

四 一本橋

親牛子牛

西條八十

西條八十

詩人

明治二十五年東
京市生

橋は一本橋、

ながれははやい、

くるりくと水車が廻る。

橋は一本橋、

親牛子牛、

薪背負つて、朝晩わたる。

くるりくと

水車が廻りや、

橋の上から、親牛子牛。

じつと眺めて、

さも不思議そに、

親が「もう」と啼きや、子も「もう」と啼く。

橋は一本橋、

水車は早い、

くるりくと朝晩まはる。

くるり廻れば、

親牛子牛、

小首かしげて啼きく通る。(コドモアサヒ)

河井醉茗

名は又平

詩人

明治七年大阪府

堺生

いなご

河井醉茗

いなご みつけた、

いけどつた。

みつけたと思つたら、

ぴよんと飛ぶ。

いなご とまつた、

稲の葉に。

とまつたと思つたら、

ぴよんと飛ぶ。

いなご かくれた、

草の葉に。

かくれたと思つたら、

ぴよんと飛ぶ。

いなご おさへた、

つかまへた。

おさへたと思つたら、

ぴよんと飛ぶ。(コドモノクミ)

野口雨情

名は英吉
童謡民謡作家
明治十五年茨城
縣磯原町生

猿の猿真似

野口雨情

山で お猿が 木登りしてる、
山で 子猿も 木登りしてる。
お猿 木登り 上手に出来る、
子猿 木登り 上手に出来る。
猿の猿真似、
子猿の小真似。

お猿 水のんで また 木に登る、
子猿 水のんで また 木に登る。
猿の猿真似、
子猿の小真似。(コドモノクニ)

島崎藤村

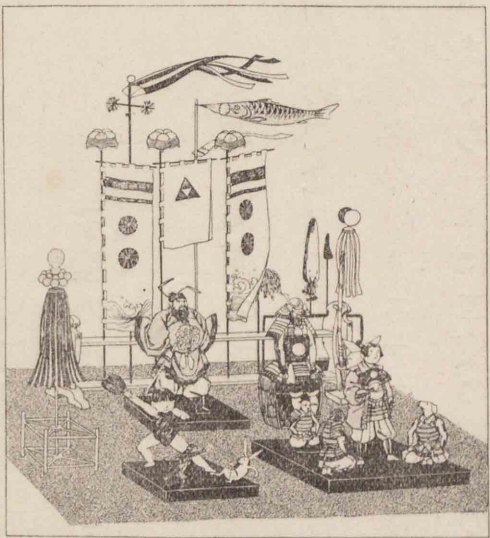
名は春樹
文學者
詩人
明治五年長野縣
木曾生
花祭
四月八日釋迦降
誕の日花をたむ
ける祭事
クリスマス
Christmas
十二月二十五
日の基督降誕
祭

五 菖蒲の節句

島崎藤村

國民の記念日でもなく、氏神の祭禮でもなく、卯月八日の花
祭とか、暮のクリスマスとかのやうな宗教的の祭日ではな
いまでも、一年に二度の節句の祝が、たゞ幼い者の爲にある
のは嬉しい。——女の兒の爲には三月の桃の節句、男の兒
の爲には五月の菖蒲の節句のあるのは嬉しい。

鐘馗
支那で疫鬼を驅
こといふ神



五月の節句の飾

あの三月の節句に取出されて、今に合唱でもはじめさうな
 雛や、古風な少年音楽隊のやうな五人囃子の代りに、五月の
 節句を祝ふためにある
 ものは、鐘馗しやうきや、鬼や、金時
 や、桃太郎などの行列で
 ある。五月の空に高く
 翻る鯉轍は恰も子供の
 國をそこに打建てたか
 のやうにも見える。狭
 苦しい町の中にあつても、あちこち、屋根の上に鯉轍を望む
 のは楽しい。鱗を描いた魚の形、長い尾、大きな眼空にかゝ

る金と赤と黒とのあの色彩、動きを悦ぶ子供の心を樂しま
 せるやうなあの飛揚。大人の心をも子供の心に返すもの
 は、あのはたくと風に鳴る鯉轍の音である。
 その他、五月の節句を祝ふものは、室内にも屋外にもあつて、
 軒に葺く菖蒲までがお伽噺の情調を誘ふのも懐かしい。
 五月の節句を迎へる頃は、何と言つても季節の感じが深い。
 桃や櫻は過去り、椿や木蓮にも遅く、山吹や藤や満天星とんだんせいなど
 の花が香氣を放つ五月の初めは、一年の中の最も楽しい季
 節の一つである。遠い山々へはまだ雪の來る日があつて、
 雨でも降れば裕では寒いこともあるが、私たちの周圍は、も
 はや若葉の世界である。この好い時候に、楽しい菖蒲の節

句がやつて来る。

桃の花が女の兒にふさはしいやうに、菖蒲はおのづから男の兒にふさはしい。一ふし鋭いところのある葉の形も好い。爽かてみづくしい葉の色も好ましい。あれを軒にかけるといふことも、優しい風俗だと思ふ。一年に一度の菖蒲湯がたつて、あの香氣が人を酔はせるばかりでなく、私たちの身をも心をも温めてくれるのも嬉しい。青々とした菖蒲の浮いてゐる中を搔分けて湯槽に浸るのも楽しみだし、あの葉が私たちの肌などへべたつとついた時の心持もわるくない。

粽の香は幼い日の香である。粽ばかりは鄙びた處で作ら

れるものほど好い。あの細長い笹の葉の卷付けてあるのを解いて、青い色に蒸された香を嗅いだ子供の頃の心持は、今もなほ忘れられない。粽の外に、柏餅・赤飯などと數へて來ると、五月の節句を祝ふもので、何がなしに懐かしい思を誘はないものはない。私たちの少年時代は、まだ軒の菖蒲にも残つてゐるやうな氣がする。(藤村讀本)

東照公

中村栗園

東照公幼ニシテ駿ニ在リ。土人端午ノ日ヲ以テ石戰ノ戲ヲ作ス。觀ル者黨ヲ分チテ之ヲ助ク。公年甫メテ十歲、奴ノ肩ニ騎シテ、往キテ之ヲ觀ル。一隊ハ三百餘人、一隊ハ之

東照公
徳川家康
中村栗園
名は和
儒者
豊前國中津生
明治十四年歿
年七十六
駿河

小笠原長生
海軍中將
宮中顧問官
子爵
慶應三年(一五七)
舊唐津藩主の家に生れた



徳川家康
狩野探幽筆 東京上野寛永寺藏

ニ半バス。人争ヒテ衆ニ赴ク。
公、奴ニ命ジテ寡ニ就カシム。
奴、怪シミテ之ヲ問フ。公曰ク、
「衆キ者ハ勢ヲ恃ミテ、其ノ心一
ナラズ。寡キ者ハ懼レテ力ヲ
専ラニス。其ノ勝ツコト必セ
リ。」ト。果シテ其ノ言ノ如クナ
リキ。(原文一日本智囊)

小笠原長生

「長官。」

六 此の一戦

五月二十七日
明治三十八年
永田中佐
名は泰次郎
三等
日露戦役當時の
聯合艦隊の旗艦
ノック
Knock

東郷大將
聯合艦隊司令長
官海軍大將東郷
平八郎
今元帥
伯爵
弘化四年(一八〇七)
鹿兒島生

三浦灣
對馬國にある小

五月二十七日午前五時五分、聯合艦隊副官永田中佐は三笠の將官寢室の戸をノックしつゝ、かう呼んだ。中から力強い「おう」の聲が聞えた。

「哨艦信濃丸午前四時四十五分發電。嚴島取次。敵の艦隊二〇三地點に見ゆ。終り。」

司令長官東郷大將に取つて、かほどの福音がまたと有らうか。さしも沈毅な大將も喜色面に輝き、直ちにそれと出動の手配をなした。

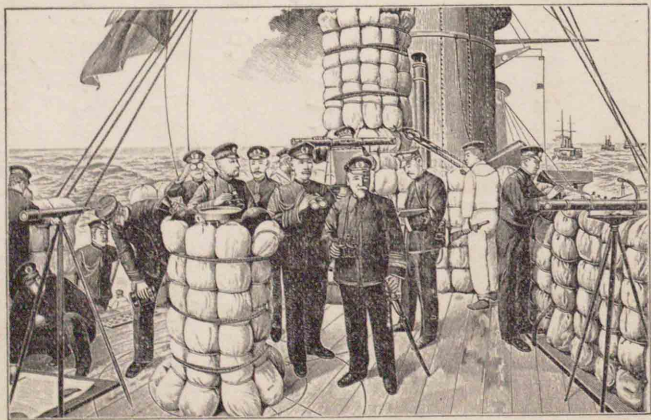
折柄濛氣が海上をこめて、展望は僅かに五六浬に止り、且西南西の風が吹荒れて波が高く、水雷艇の如きは難航を極めたので、大將は終に水雷艇隊を三浦灣に避難せしめ、その他

沖の島
 福岡縣宗像郡の
 屬島
 鐘崎の西北凡そ
 七十軒
 片岡第三艦隊司
 令長官
 名は七郎
 後に海軍大將
 男爵
 鹿兒島生
 大正九年薨
 年六十八
 若宮島
 壹岐本島の北方
 にある小島
 玄海
 福岡縣の北方の
 海洋

を率ゐて急進し、正午頃沖の島の北方約十哩の地點に達した。時恰も片岡第三艦隊司令長官から、
 「敵艦隊は壹岐國若宮島の北方十二哩にありて、北東微東に航しつゝあり。」
 との電報があつた。よつて大將はこれに基づいて時々針路を變じ、滿を持して敵の來るを待受けた。
 玄海波吼えて潮は花と散り、四邊の光景そゞろに雄心を振ひ立たせる折柄、南西微西に我が第三艦隊が現れ、次いで第五第六の兩戰隊が現れた。やがて南西に當り、濛氣を衝いて敵の大艦隊が續々と見え出した。時正に一時三十九分、殺氣は陰々として天地に漲る。

皇太子殿下
 大正天皇
 一文字吉房
 名刀の名
 吉房は備前の刀
 工

かくと見た見た大將は、檣頭に大軍艦旗を掲げさせて戰鬥開始を示し豫期の如く先づ敵の左翼列の先頭から撃破せんものと、第一第二の兩戰隊を率ゐて針路を北西微北に轉じ、次第に敵の先頭に迫つた。
 と見れば、大將は凜々しい軍装にその身を固め、項から雙眼鏡を掛け、嘗て皇太子殿下から拜領した一文字吉房二尺二寸の軍刀を帶し、悠然として旗艦三笠の最上艦橋に立つてゐる。



三 笠 艦 上 の 東 郷 大 將

加藤參謀長
後の内閣總理大臣
元帥海軍大將
子爵加藤友三郎
安藝國生
大正十二年薨
年六十三

大將時に年五十九。天稟の偉器は多年の修養に玉成せられて、威容さながら神の如く、加之、その左右には加藤參謀長以下幾多の幕僚及び艦長等相並び、今や遅しと震天動地の活劇を待つてゐる。正にこれ朝日に匂ふ櫻花の、咲きも残らず、散りもはじめぬ風情である。

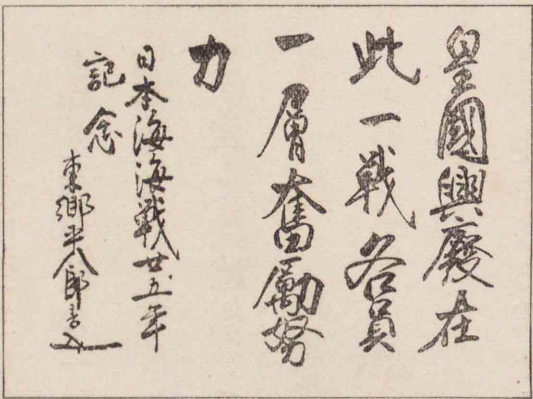
時に敵は三笠の南微西約七哩にあつて、二列縦陣を布き、世界の征服を象徴せる青線交叉の軍艦旗を翻しつゝ、右翼列の先頭にはスウォーロフ外三隻より成る一隊を置き、オスライビヤ外三隻より成る一隊は、左翼列の先頭を承り、ニコズムルードの二隻は左右兩側の中間に在つて前方警戒の

筆蹟

皇國興廢在、此
一戰、各員一層
奮勵努力。

日本海海戰廿
五年記念
東郷平八郎
花押

秋山參謀
秋山眞之
後海軍中將に累
進した
伊豫國生
大正七年卒
年五十



東郷平八郎筆蹟

任に當り更にオレーグアウローラ以下二三等巡洋艦の一隊及びドンスコイモノマーフその他特務艦船等は、後方濛氣の中に、數哩に互つて、堂々たる威容を整へてゐた。

敵の全勢力がことごとく出現したのを眺めたわが東郷大將は、いと満足げに微笑を浮べ、好位置を占める準備として、先づ針路を西方に變ぜしめ、敵を左舷正横に望みつゝ、暫時進航せしめた。時は進んで一時五十五分になつた。突如、大將は秋山參謀を麾

き、何事をか命じた。

見るまに、旗艦三笠の檣の上高く四色の彩旗が翻つた。

「皇國の興廢此の一戦に在り。各員一層奮勵努力せよ。」
全艦隊幾萬の將卒は一齊にこれを仰ぎ見て肅然として一語なく、中には感極つて熱涙を流したもののさへあつた。

(撃滅)

七 筍

薄田泣菫

私は昨夜筍掘の夢を見ました。

私の故郷の家には地續きに小さな孟宗竹の藪があり、それから少し奥まつた邊に、やゝ大きな眞竹の藪があります。

薄田泣菫
名は淳介
文學者
新聞記者
明治十年岡山縣
連島町生

櫻の花が咲いて、空に思ひがけない春雷がごろ／＼と鳴ると、それをきつかけに、海では櫻鯛が網に上ります。その頃になると、孟宗藪には、あつちこつちに、もく／＼と土がもち上つて、赤茶けた産毛をはやした筍が、ひよつこりと頭をもちあげます。

「お、筍が……」

私はそれを見つけた瞬間、言ひ知れぬ歡喜に胸をふるはせたものです。筍は、私にとつては、狗ころと同じやうに、短い



筍

産毛をはやした動物だつたのです。私は草履をはいたまま、垣のこはれから、鰻のやうに藪のなかに滑り込みました。があつちでもこつちでも、筍の縮れつ毛の頭を見つけると、自分の踏んでゐる草履の下から、今にもむつくりと赤土がもちあがりさうな氣がして、足の裏がくすぐつたくてたまらなかつたのを覺えてゐます。私はそこらの草を掻集めて来て、それを筍の上に被せてやりました。かうすれば、通りがかりに竹藪をのぞいて見るいたづらつ兒の眼からも遁れることが出来、また日光をぢかに受けなすむので、中味の肉がながく柔かさを保つことが出来るからでありました。

それからといふものは、私は毎日幾度か藪へ滑り込んでは、人知れず、どんなに筍の成長を楽しんだことでせう。親にかくれて物置小屋の狗ころを愛撫するのと同じ心持です。狗ころが見る度に太つていくやうに、筍もその度に寸をのばしていくらしく思はれました。實際筍の成長ほど目ざましいものはありません。午前と午後とでは二十糎もたけがちがつてゐるやうなこともありました。私はそんなことをしてはならないと思ひながらも、時々抑へきれない欲望に驅られて、筍の脊を手のひらで撫でまはしてみたり、肩へ手をかけてちよつと揺ぶつてみたりしました。筍は強健な脊髄をもつてゐるやうに、びくともしませんでした。

寶島寺
岡山縣連島町に
ある眞言宗の名
刹

寂嚴上人

備中寶島寺の住

僧

書家

明和六年(一四三〇)

寂

年七十

「大きくなれ。大きくなれ。」

私はかう言つて、土に生えた狗ころに挨拶しながら、またもとのやうに青草をその上に被せておきました。

やがて筍掘の時節が到来します。寶島寺の寂嚴上人は、あ
る人から

「和尚さま。味噌をつきますには、どういふ日が吉日でございませう。」

ときかれたのに答へて、

「さればさ、麴のよく熟した日が吉日であらうな。」

といつたさうですが、筍掘にもそれ〴〵吉日があります。

それは、こちらが掘りたくて、もう待ちきれなくなつた日で

あります。私は筍の毛皮を損ねないやうに、周囲の土を掘下げていきました。掘つても〴〵筍のお尻が見えないので、思ひのほか大きいのにびつくりすることも度々ありました。

掘りのこされた筍は、日々に脊をのばしていきます。たけが伸びると共に、下から次々に古い毛皮を脱ぎ捨てていきますので、その後から、湯上りのやうな新鮮な若竹の肌が、五月の日光に痛々しいまでに輝いてゐるのが見えます。昔五合庵の良寛上人は、自分の坐つてゐる疊を破つて、頭をもちあげた筍の爲に、天井に抜け穴を拵へてやらうと、蠟燭の火をいぢつてゐるうち、過つて庵を焼いてしまつたさうで

五合庵

良寛上人の住ん

でゐた越後國

上山の草庵

良寛

越後出雲崎の歌

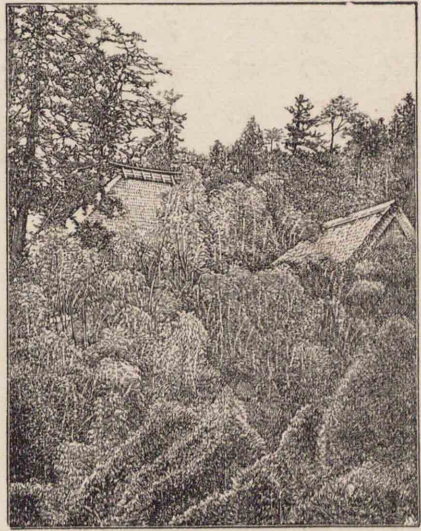
僧

天保二年(一四九一)

寂

年七十四

すが、若竹にならうとしてゐる頃の筍ほど力と新しさと愛
とに富んだものはありません。やがて節々からは枝が伸



五合鹿

び、枝からは葉が伸びて朝
になると、その葉の先から
露が雫になつて滴り落ち
ます。五月の新鮮な、爽か
な風が愛撫するやうに吹
いて來ると、葉も、小枝も、幹

も、恥かしさうに、無言のまま、しなやかに躍ります。

私は阪神の間に住んでから今まで十幾年、ゆふべ夢を見て、
初めて自分が久しい間筍に遠ざかつてゐたことに氣がつ

阪神
大阪神戸

きました。明日は、何をかいても、竹藪のあるあたりまで、ぶ
らぶら歩いていつてみたいと思ひます。(天地讃頌)

八童心

北原白秋

越後の良寛禪師は童心の持主であつた。かういふお話が
ある。

一に童男童女、二に手毬、三におはじき、これが禪師の三好よきであつた。これで見ても、良寛様は子供がどんなに好きであり、又子供たちと遊ぶ事がどんなにうれしかつたかが思ひやられる。

その良寛様も、子供たちには随分馬鹿にされて、盛になぶら

北原白秋
名は隆吉
詩人
歌人
明治十八年福岡
縣生

れたり、からかはれたりしたらしい。それにも拘らず平氣で、一生懸命に遊びほれてゐた良寛様が有難い。

ある時、良寛様は例の通り、子供たちとかくれんぼをしてゐられた。鬼になつた



良法弟通澄筆

良寛様が目を瞑つて、「もういゝよ」といふかはいゝ聲を一心に待

受けてゐられる。と、丁度日のくれどきで、子供心の何がな欲しくなる時である。家々の燈がちら〜とつきだすと、子供たちは急に遊をや

めて、一人残らず、こそ〜と歸つてしまつた。そこは子供だから良寛様も何もうつちやらかしてある。むろん、いくら待つても、「いゝよ」といふものがない。そのうちに日が暮れて、長い夜が來た。さうしてたうとう夜が明けてしまつた。良寛様はそれでもまだ一生懸命だ。心から目をつぶつて、やはり同じ處に同じ姿をしたまゝ、「もういゝよ」と子供が呼ぶのを待つてゐられた。その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

それから、またある時のことである。良寛様が今度はかくれる事になつた。そこで、見つけられては大變だといふの

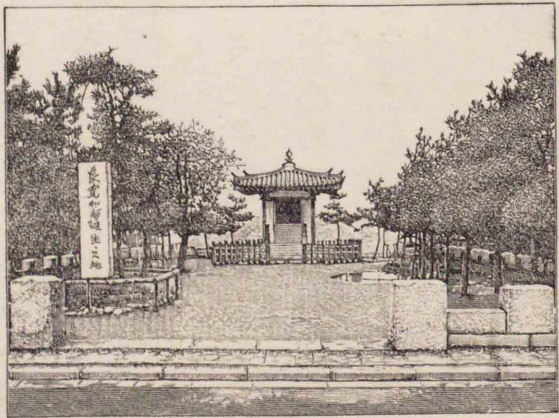
で、さつそく田圃の稲むらの中にもぐり込んで、それはかはいらしいことだ、小さくなつて、まるで二十日鼠見たやうに頭からすつぽりと稲藁をかぶつて、おどくしてゐた。すると子供たちは、また例の通り一人残らずこそくと歸つてしまつたのである。それを良寛様は少しも御存じがない。また日が暮れて、夜が来て、そしてまた夜が明けた。稲むらには霜が眞白におき、朝の日が昇り始めると、百姓がやつて来て何の氣もなく稲たばをはづして、「おやつ」と驚いた。見れば、良寛様が小さくなつてもぐつてゐられるではないか。「おや、良寛様が」といふと、あわてて、「静かにしろ、静かにしろ、子供に見つかる。」

その心のあどけなさ、ありがたさ。まるで子供である。

禪師の玉のやうなこの童心は、榮藏といつた童のむかしそのまゝである。それは何ものにも代へがたい、二つとない尊い天稟である。

榮坊がまだ八歳か九歳の頃だつたといふ。ある日、父親からひどく叱られたので、つい上目をした。そこで、またく叱られた。「親を睨むやうな奴は躰になるぞ。」これを聞いた

良寛堂
新潟縣出雲崎町
にある



良寛堂

良寛様の榮坊は外へ出ていつたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ、家内中大心配で、あちらこちらと捜し索めるとある濱邊の岩の上に、悄然とたゞずんで沖の方ばかり眺めてゐた。「榮坊、どうした」といふと、榮坊曰く、「おれ、まだ蝶にならないか。」

蝶になるといはれたので、ほんたうに蝶になると思つて、一心に海を見つめてふるへてゐた童心の正直さ。これをこそ生一本といふのであらう。洗心雜話

九 競 漕

久米正雄

競漕の日は來た。空は朝から美しく晴れあがつた。大學

久米正雄
文學者
明治二十四年長
野縣生
大學
東京帝國大學

の事務室から小使が朝早くやつて來て、合宿所の前に樺色の大きな旗を立てた、それが晴れがましく見えた。

午後になると、晴れたまゝに風が吹いて來て、應援船の旗をはたくとならした。コースには可なり荒い波が立つた。しかし愈、文農の競漕が始らうとする頃になつたら、珍しい夕風が來た。

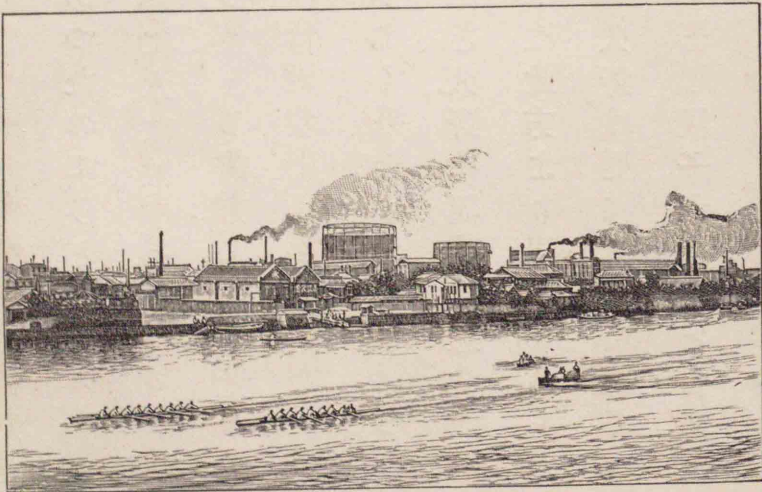
選手は皆樺色のユニフォームを着た。それが久野には何だか身が緊つたやうに感ぜられた。土手では觀衆が一種の尊敬と好奇との念を以て、この樺色の服を着た選手たちを道をあけた。文科の端艇が先づ拍手に送られて臺船を離れた。窪田等はいつともよりは緩やかな調子で漕出した。

コース
競漕場
Course
航路
水路
文・農
文科と農科
ユニフォーム
Uniform
制服
臺船
樺橋につないだ
方形の船
棧橋から端艇に
乗移る便に供す

淺草岸
向島堤の對岸
隅田川の右岸

そして三十本ほど試漕をした。やがて審判艇の差出す綱に繋留した。續いて農科の艇も繋がれた。艇庫と土手と應援船とから「文科あ。農科あ。樺あ。紫い。」などと呼ぶ聲が錯綜して起つた。審判艇は二つの艇を曳いて出發點へ向つた。漕手は皆艇の中に寝てゐた。久野は舵の綱をつまぐりながら應援の聲を聞いてゐた。艇は出發點の赤い浮標に着いた。水路を見渡すと、風は全く凩いでゐるのではなかつた。絶えず北東から吹いて來て艇首を左へ曲げた。久野はそれを直すために、幾度も、二番に軽く櫂を入れさせなければならなかつた。艇首を曲げて出發しては、只さへ淺草岸へ向きたがる艇の癖を一層

激しくするやうなものだ。若し水路を外れて淺瀬を漕いだら、艇脚のとまるのは明かである。岸の審判所では、「文科の艇は出過ぎたから櫂を入れるな。」と叫ぶ。久野は氣が氣でなかつた。そのうちに用意の令が下つた。艇首は又一瞬間の強風に曲げられた。「えゝまゝよ、もうなるやうになれ。」と久野は目を



トーダスの漕競

シート
Seat
席

つぶつた。と同時に、號砲が響き渡つた。久野は、用意と號砲との間がほんの一瞬間であつたのに、ひどく永いやうに思つた。二つの艇の權は同時に水にはひつた。久野の眼には敵の艇と自分の艇との前方に白く光つてゐる水路の外、何もなかつた。久野の艇は、どうも滑り出しがよくなかつた。「こいつはいけない。皆あわてたな。」と窪田と久野は同時に思つた。敵艇を見ると、確かに一二シートは此方より出てゐるらしい。「ゆつくり！」と窪田が叫んだ。久野は更に大きな聲でも一度その言葉を全艇に傳へた。皆の調子がやつと合ひだした。この時競漕中に敵艇を野次るので有名であつた農科

スプラッシュ
Splash
水をはねとはすこと

の舵手が「敵艇を抜くこと約半艇身」と叫んだ。久野は言はせもあへず「嘘だぞ」とどなつた。今までだまつてゐた久野は、一度その言葉を言つてしまふと、急に口の緊りが解けるやうな氣がして、恐しく雄辯になつた。その中に農科の三番が大きなスプラッシュをした。水煙が鮮かにぱつと騰つた。久野は機を得たと言はんばかりに「やつたぞ、大きなスプラッシュを」と叫んだ。味方一同これに元氣づいた。敵の艇は久野に野次られて、却て沈黙してしまつた。二つの艇はやつと並んで來た。そして水門前で文科は約半艇身先んじてゐた。それでも、農科の舵手は「向ふはもうへたばつたぞ。」などと言つた。久野も、なかに、此方が出てゐ

るぞ。」と野次り返した。しかし、心持には少しもそんな言葉戦などする餘裕はなかつた。

水門に來かゝると、久野は「さあ水門だ。」と、敵に先んじて叫んだ。如何なる舵手でも言ふにきまつてゐる場所の指示を、機先を制して叫ぶのも、一つの戦術であつた。早く言つた艇が、遅く言つた艇より先にその場所に届いた譯だから。

後ればせに、農科は水門で特別の力漕を十本やつた。それで兩艇はまた並んだ。後から追ひかけられると、何だかずつと追抜かれるやうな氣がするものだ。久野の艇は、何だか何時もより艇脚が遅いやうであつたが、暫くすると、又文科の艇がじり〜と抜き出した。久野は「この調子で。」と叫

ピッチ
調子

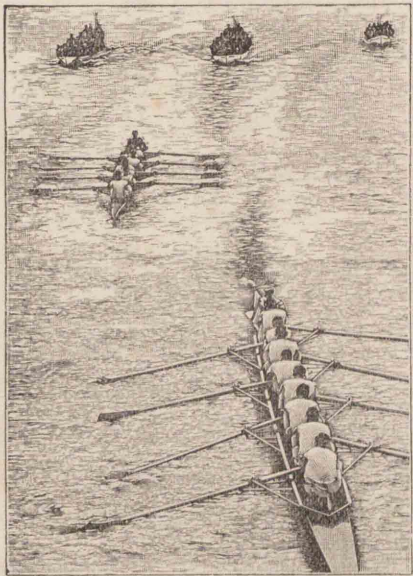
ラスト、ヘヴィ
Last-heavy
最後の力漕

んだ。農科の艇は、沈黙してゐた。そして渡場での力漕十本は、もう此方に對して何の效力もなかつた。窪田は半眼でその敵の力漕を見やりながら、やつと安心してピッチを上げ出した。

洗場では半艇身以上先んじてゐた。併し此處での半艇身くらゐの差では、敵のラスト、ヘヴィが利けば何の役にも立たない。久野は「あと一分だ。もう死んでもいゝぞ。」などと激励した。この「あと一分。」といふ練習中に用ひ慣れた言葉が何よりも選手を元氣づけた。一分間なら、いくら疲れても漕げる筈なのだ。

皆が疲れて來た。すると、不思議に艇がよく出だした。文

科の艇は、疲れて來ると各個人の癖が取れて、全體としての調子がよく揃ふ。協力が此の時始めて完全に出來た。そ



決勝點に入らうとす瞬間

して窪田の權につれて、各は機械的に身體を前後に動かした。農科のラストも、實によく出た。しかし、それを見て久野が氣遣つてゐる間に、文科の方のヘヴィも非常によく利いた。多年の熟練で窪田のピッチがぐんぐん上つた。「もう十本。」決勝線に入るまでは

随分長く感じられた。久野は、ひよつとすると、もう決勝線へはひつてゐるのに、審判の號砲が發火しないのではないかと思つた。その刹那、號砲は轟いた。皆は漕ぐことをやめて、艇内にどつと身を伏せた。この時、久野は嵐のやうな喝采が水上に響き渡つてゐるのを始めて聞いた。それは決勝點に近づく時から鳴りもやまなかつたのであるが、彼の耳にははひらなかつたのだ。

「どつちが勝つたのだ。」と、二番の早川が苦しい息の中から情ない聲を出した。

「大丈夫、僕等だ。」と久野は答へた。しかし、久野自身も勝利を確信してゐるのではなかつた。そして、審判所に掲げられ

た樺色の旗を見るまでは安心がならなかつた。喝采はまだ續いてゐた。今までに類のない程の接戦であつたが爲に、敵味方のいづれにも屬してゐない觀衆までも熱狂せしめたのである。

「窪田君艇を岸へつけようか。」と久野は言つた。

「待ち給へ。もつとゆつくりでいゝよ。こんな事はめつたに無いんだから、ゆつくり勝利の心持を味ははうぢやないか。」と窪田は答へた。そして艇は喝采の渦卷の中で、なほも靜かに水に漂はされてゐた。

その時、久野はふと農科の艇を見た。それは今岸に着けられた處であつた。そして、野次が敗れた選手を艇内から扶

け起して、岸へ上らせてゐた。三番の大きな男が、二人の野次の肩にもたれかゝつて、涙をかくしながら運び去られた。彼等はわざとしてゐるのか、眞に動き得なかつたのか、とにかく一人では立てぬまでに疲れ果ててゐた。

たつた半艇身の差が、何といふ感情の相違を作つた事であらう。時間にすれば二分の一秒を出ない間である。空間にすれば四米と出ない處である。而して全體の水路から見て眞に何百分の一に足らぬ間である。この少しばかりの、しかも効果の恐しく大きな差は、そも何處から出たのであらう。一本の櫂毎に三四糎づつの差が出来るといふ豫定が主將の窪田にあつたであらうか。毎日の練習の何分

間かの優越が此の差を作つたと、久野自身も信ずる事が出来るであらうか。もし此方の選手の誰かが一本の櫂を流したら、どうだらう。忽ち勝敗の數は顛倒するかも知れない。久野がちよつと舵を入れ損つたら、どうだらう。忽ち艇は追抜かれたかも知れない。眞に危い勝負であつた。「それはともかく、勝つたには違ないんだ。」と、久野は置去られた敵の艇をなほも見ながら考へた。その間に、應援船が四方から漕寄せた。選手は、やつと蘇つたやうに、勝利を感じ出した。勝利といふものの齎す感情は、すべてのその中で最も妙な、複雑なものであると久野は思つた。夕日が、今戰のあつ

た水路を掠めてゐた。久野は再び岸にゐる觀衆及び近くに漕寄せた應援の人々の顔を珍しげに見廻した。

(學生時代)

一〇 洋上の夕照

水谷まさる

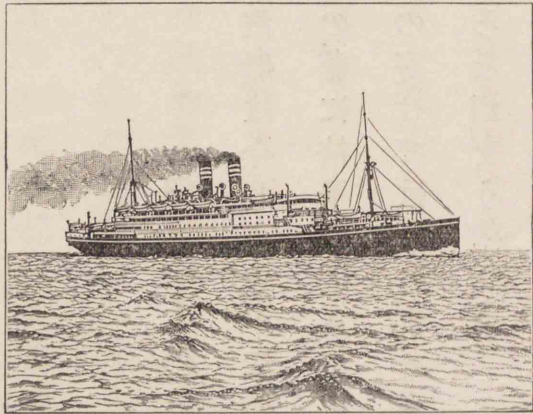
水谷まさる
名は勝
詩人
明治二十七年東
京市生
太平洋
Ocean アジア及び
オーストラリ
ア洲と南北ア
Pacific ア洲と北ア
メリカ洲との
間にある大洋

汽船は今しも太平洋の上を走つてゐる。わたしは通風筒の蔭に椅子を据ゑて、それに腰をかけて浪を見てゐる。浪の寄せては返し、寄せては返しするなかに、わたしはいろいろな幻をうかべる。

次から次へと浪は幻を生む。そして、ばつと白い波頭が碎けると、幻は消える。みんな日本に残つてゐる人たちの顔

ネクタイ
襟飾

エンジン
蒸氣機關

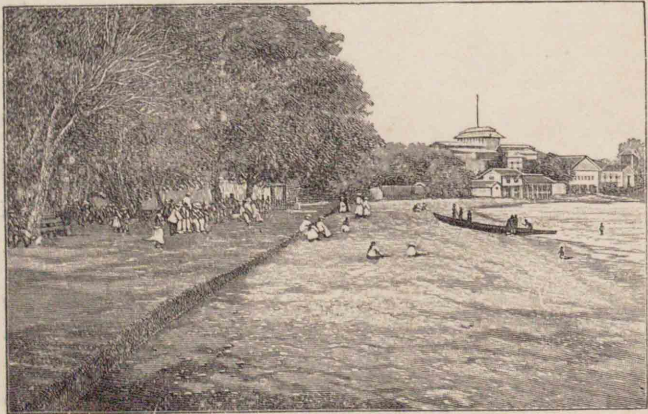


太平洋上の汽船

だ。遠く離れたなと、わたしは思ふ。南をさしてだいぶ来たから、この夕暮は快活である。風も氣軽である。わたしのネクタイは、ともすれば首に巻きつく。帆綱は口笛を吹いてゐる。ほがらかなたはむれ心で、——なんだか心が軽い。海なんて、こはくない。汽船はちつとも揺れはしない。ぐんぐん走つてゐる。エンジンの音はをどる心臓である。この汽船は愉快な若者だ。

布哇
Hawaii 大洋洲北部の
群島
米領

もう三晩も寝たら、常夏の國布哇だ。くすんだ間服のズボンを脱いで、さつぱりとした白のズボンと白の靴とをはかう。そして、心のなかに勢のいい噴水をしかけよう。寂しさや悲しさなんかは、ほとばしる心の噴水と一緒に、空に散つてしまふがい。わたしは仔馬のやうに、なんにも考へまい。そして、常夏の國なる布哇の海岸の白砂を、さわやかに踏まう。



布哇イキキ公園

ところで、今はすつきりした夕暮さわやかな初夏の感じだ。嘗て地圖で見た太平洋が、こんな海とは知らなかつた。わたしは仕合せだ。

やがて時移つて、わたしは美しい夕焼雲を見た。その夕焼雲が美しかつただけに、わたしの胸は痛んだ。

東も西も水ばかり、

南も北も水ばかり。

太平洋のまんなかで、

汽船の上からふとも見た

夕焼雲がわすられぬ。

いつでもあんな美しい

夕焼雲があるんだろ。

けれど誰にも見られずに

さびしく消えて行くんだろ。

東も西も水ばかり、

南も北も水ばかり。

太平洋のまんなかの、

さびしいけれど美しい

夕焼雲がわすられぬ。

それは沈みゆく太陽のほしいまゝな美の溢れであつた。紅く染めだした雲。雲と雲との間の匂はしい空。はた雲の端に光る金のすぢ。そして、厚い雲の下の静かな紫。

海は浪を揚げて夕暮を融かさうとしてゐた。西へ遙かな紅が流れ、空と水とうち浸るあたりに、光の金の蛇が、きらきら躍つてゐた。

わたしの心は、思ひがけぬ美しさに、すっかり打たれてしまつた。汽船の甲板に立つて、手すりにつかまつてゐる手は、喜にふるへた。だが、あまりにも壯麗なものを見る時、心の痛まぬ人があらうか。

わたしの心は痛んだ。わたしの觀望はまばゆかつた。わたしの胸には溜息が充ちた。この美しさをまともに眺め得るだけのよい感覺を、わたしが持たぬのを恐れた。それにしても、このほしいまゝな美の溢れのもつたいなさ。

神は人の目を豫期することなしに、いつもかゝる夕焼を、この太平洋のまんなかにお示しになつてゐるのだ。(遠き幻)

一一 比叡の鳥

高濱 虚子

寢床を出て、楊枝を使ひながら湖水の見える部屋にいつて見る。朝日が一杯にはひつてゐる。

湖水と思はれる邊は雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつてゐるので、我が眼よりやゝ高く、やゝ低く、數知れぬ杉の梢がさながら鉾のやうに突つ立つてゐる。左手には北谷の向ふに當る杜が鋸の齒のやうな杉を背に並べて湖

高濱虚子

名は清

俳人

明治七年愛媛縣

松山市生

湖水

琵琶湖

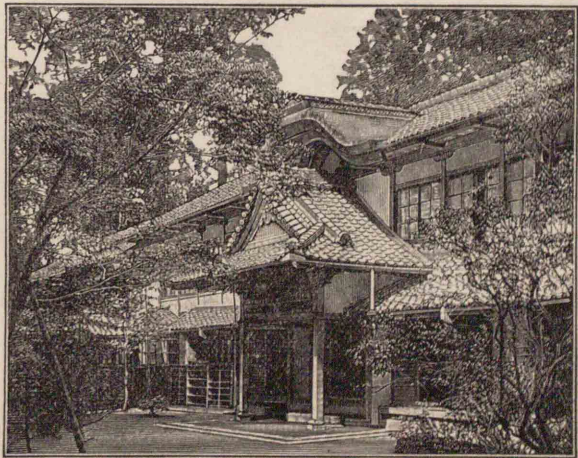
部屋

比叡山延曆寺東

塔の宿院の室

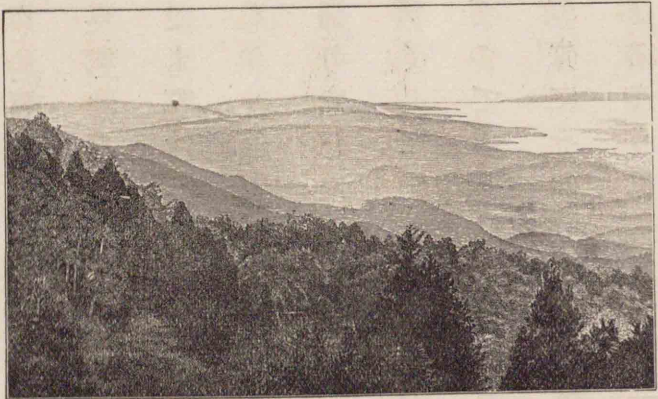
の方に流れてゐる。空氣がいやが上に清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の杜も、ともに新鮮な色をしてゐる。さうして、その間を薄い霞が流れてゐる。

非常に静かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ。たゞこの天地を我が物顔に啼囀つてゐるのは小鳥だ。何といふかはいゝ聲の小鳥があるものであらう。名の分らぬのが残念だ。その杉の梢で一羽が啼いてゐる。



比叡山延曆寺宿院

彼方の杉の梢で他の一羽が答へてゐる。又遙か向ふの谷



比叡の杉

深く他の一羽が應じてゐる。よく耳をすますと、なほ二三羽の聲が、どこかで聞えるやうだ。この小鳥の合奏を破るやうな別な聲の小鳥が突然その間に高音を張る。前の小鳥程優しい聲ではないが、又りゝしいところがあつて、その聲の空山に響く趣が何とも言へぬ。これも名は分らぬ。それが一羽ではない、三羽、四羽と段々聲の主が殖えて来る。

前の小鳥が縦糸なら、この小鳥は横糸だ。互に錯綜して、よく諧調を保つところが面白い。

突然けんくとけたましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば彼方の峯にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやゝ急調だ。山鳥でもあらうか。前の二つの小鳥で織りなした美しい絹をたゞ一聲に引裂いたかと疑はれる。暫くして、その聲は谷の底の底峯の奥の奥に浸みこんでしまつて、あとはもとの静かさになる。

眞先にその静かさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれる緋のやうに美しい。一つの緋が置かれると、また縦糸を織つて前の小鳥が啼く。横糸を織つて次の小鳥が啼く。緋

が啼く。縦糸が啼く。横糸が啼く。この絹をまた山鳥が破るのかと思ひながら待設けてゐると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似てゐて、谷の神社の鰐口が口をあけてつぶやくのかと思はれる。他の鳥の聲々が皆高調で晴々とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すのが面白い。友は啄木鳥だらうといった。二人の小僧は山鳩だらうといった。

湖水の上にはまだ漠々とした白雲が漂つてゐる。杉の梢を渡る霧は少しづつ薄らいで、だんくと谷が深く見えて来る。(新寫生文)

森 鷗外

一二 安井息軒

森 鷗外

名は林太郎
醫學者
文學者
醫學博士
文學博士
陸軍軍醫總監
東京帝室博物館
總長
石見國津和野生
大正十一年薨
年六十一

仲平

安井衡

仲平はその字

號は息軒

日向飢肥藩士

幕末の儒者

明治九年歿

年七十八

父

名は朝宗

字は子金

號は滄洲

文化六年(一八六九)

歿

年六十餘

「仲平さんはえらくなりなさるだらう。」といふ評判と同時に、「仲平さんは不男だ」といふ陰言が清武一郷に傳へられてゐる。
仲平の父は日向國宮崎郡清武村に二段八畝程の宅地を持つて、そこに三棟の家を建てて住んでゐる。財産としては宅地を少し離れたところに田畑を持つてゐて、年來家で漢學を人の子弟に教へる傍、耕作を輟めずにゐたのである。
併し仲平の父は三十八の時江戸へ修業に出て、中一年置いて、四十の時歸國してから、飢肥藩に任用されるやうになつたので、今では田畑の大部分を小作人に作らせることにし

飢肥藩

日向國南那珂郡
藩主は伊東氏

てゐる。

仲平は二男である。兄文治が九つ、仲平が六つ、父は兄弟を残して江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた後、兄弟の脊丈が伸びてからは、二人共毎朝書物を懐中して畑打に出た。そして外の人が煙草休をする間、二人は讀書に耽つた。父が始めて藩の教授を命ぜられた頃の事である、十七八の文治と十四五の仲平とが例の畑打に通ふと、道で行逢ふ人が、皆言合せてやうに二人を見くらべて、連があれば連に何事をかさゝやいた。脊の高い、色の白い、目鼻立の立派な兄文治と、脊の低い、色の黒い、片目の弟仲平とが、いかにも不釣合に見えたからである。兄弟同時にわづらつ

筆蹟

旅行心得の條々

道筋に名所古跡あらは必ず見物すへし疲れたりとて見ざれば後に悔る事多き物なり柔和謙遜は旅中第一の寶なり假にも人と争ふ心あるへからず武藝の試合は勝負を重する故わけて此心得を重しとす夢の間も忘るましき事
丑正月望前一日 半九齋

た疱瘡が、兄は軽く、弟は重く、弟は大痘痕あはたになつて、剩へ右の

旅行中心心得

道筋に名所古跡あらは必ず見物すへし疲れたりとて見ざれば後に悔る事多き物なり柔和謙遜は旅中第一の寶なり假にも人と争ふ心あるへからず武藝の試合は勝負を重する故わけて此心得を重しとす夢の間も忘るましき事
海(まき)

丑正月望前一日 半九齋

ませて、一足先に出て、晩は少し居残つて仕事をして、一足後

安井息軒 筆一 蹟藏

目が潰れた。父も小さい時疱瘡して片目になつてゐるのに、又仲平が同じ片目になつたのを思へば、偶然といふものも残酷なものだといふ外はない。

仲平は兄と一緒に歩くのをつらく思つた。そこで

朝は少し早めに食事を済

れて歸つて見た。併し行逢ふ人が自分の方を見て連とささやくことは止まなかつた。そればかりではない、兄と一緒に歩く時よりも、行逢ふ人の態度が餘程無遠慮になつて、さゝやく聲も、常より高く、中には聲をかけるものさへある。「見い。けふは猿がひとりで行くぜ。」

「猿が本を讀むから妙だ。」

「なに。猿の方が猿引よりは好く讀むさうな。」

「お猿さん。けふは猿引はどうしましたな。」

仲平に先だつて、體の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大阪へ修業に出て、篠崎小竹の塾に通つてゐた時に死んだのである。仲平は二十一の春、金子十兩を父の手から受取つて

篠崎小竹

名は彌

大阪の儒者

嘉永四年(三二二)

歿

年七十一

古賀侗庵
 名は焔
 精里の第三子
 昌平饗の儒者
 弘化四年(二五七)
 歿
 年六十
 昌平饗
 昌平坂御學問所
 幕府の學校
 今の本郷區湯島
 にあつた

清武村を立つた。そして大阪土佐堀三丁目の藏屋敷に着いて、長屋の一間を借りて自炊をしてゐた。儉約の爲に大豆を鹽と醬油とで煮て置いて、これを飯の菜にしたのを、藏屋敷では「仲平豆」と名づけた。同じ長屋に住むものが「あれでは體が續くまい」と氣遣ふほどであつた。中一年おいて二十三になつた時、故郷の兄文治が死んだ。學殖は弟に劣つてゐても、才氣の鋭い若者であつたのにとかく病氣でたうとう二十六歳で死んだのである。仲平は訃音を得て、すぐに大阪を立つて歸つた。

其の後、仲平は二十六で江戸に出て、古賀侗庵の門下に籍を置いて昌平饗に入つた。後世の註疏に據らず經義を究め

松崎謙堂
 名は復
 掛川藩の儒者
 肥後生
 弘化四年(二五七)
 歿
 年七十四
 林
 林大學頭



聖
 堂
 の
 講
 所
 釋
 史
 料
 編
 纂
 所
 藏

ようとする仲平の爲には、古賀より松崎謙堂の方が懐かしかつたが、昌平饗に入るには林か古賀かの門に入らなくてはならなかつたのである。痘痕があつて、片目で脊の低い田舎書生は、こゝでも同窓に馬鹿にされずには濟まなかつた。それでも仲平は無頓着に座右の柱に半折に何やら書いて貼つてあるのを、からかひに來た友達が讀んで

しのぶが岡
上野の岡
聖堂はもと上
野にあつた

見ると、今は音をしのぶが岡の時鳥
と書いてあつた。
いつか雲井のよそに名のらん

「や、えらい抱負ぢやぞ。」と、友達は笑つて去つたが、腹の中では
稍、氣味悪くも思つた。これは仲平が十九の時、漢學に全力
を傾注するまで國文をも少々研究した名残で、わざと流儀
違の和歌の眞似をして同窓の揶揄に酬いたのである。
仲平はまだ江戸にゐるうちに、二十八で藩主の侍讀にされ
た。そして翌年藩主が歸國される時、供をして歸つた。
江戸がへり、昌平饗仕込と聞いて、仲平さんはえらくなりな

さるだらう。」と評判する郷里の人たちも、痘痕があつて、片目
で、脊の低い男振を見ては、「仲平さんは不男だ。」と陰言を言は
ずには置かなかつた。

大儒息軒先生としてその名を知られるやうになつたのは、
仲平が四十八の頃からである。(鷗外全集)

三計塾ノ記

安井息軒

三計トハ何ゾ。一日ノ計ハ朝ニ在リ、一年ノ計ハ春ニ在リ、
一生ノ計ハ少壯ノ時ニ在レバナリ。何ヲ以テ吾ガ塾ニ名
ヅケシカ。諸生ノ晏起ト春嬉トヲ慮レバナリ。
凡ソ吾ガ塾ニ遊ブ者ハ、皆此ノ道ニ志有ル者ナリ。何スレ

ゾ其ノ晏起ト春嬉トヲ過慮スルヤ。人少ケレバ則チ年ニ
 恃ミ、氣盛ナレバ則チ物ニ動ク。年ニ恃ミテ而シテ物ニ動
 クハ、情嬉ノ由リテ生ズル所ナリ。情嬉既ニ生ズレバ、則チ
 一生ノ計モ亦荒ム。故ニ吾ガ塾ニ入ル者ハ、三者ノ計ヲ思
 ハザルベカラザルナリ。(原文一息軒遺稿)

櫻井忠温

陸軍少將

明治十二年愛媛

縣生

松浦先生

名は巖暉

一三 鐵 棒

櫻井忠温

私が松浦先生にお目にかゝり、その門人となつたのは、十五
 歳の春であつた。先生は四條派の畫家であつた。
 それから、私は毎日中學校から歸ると、先生の内へいつた
 先生から描いてもらふ手本を、唐紙の八つ切に描いて持つ

て行くのである。それを、先生は、一々手を取るやうにして
 直された。

筆蹟
 戦争文學集の口
 繪として昭和三
 年作者の特に揮
 毫したもの



櫻 井 忠 温 筆

弟子は十四五人ぐら
 ゐあつた。私は手の
 筋がいゝといつて先
 生から度々褒められ
 た。そして、存外早く
 「寫」をするやうになつ
 た。「寫」といふのは、古

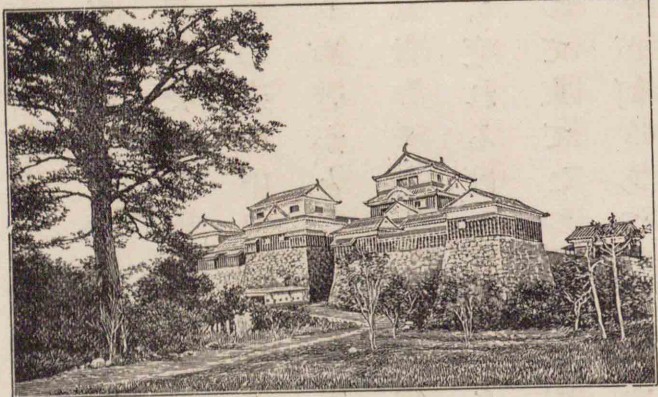
人の繪を透寫しするので、寫三千枚で、一かどの繪かきにな
 れるとしたものである。

私はその後一年にして、士官候補生になつた。繪かきが兵隊になつたといふので、ひどく先生の機嫌を損じた。兵隊にはなつたものの、私は、これまで荒つぽい仕事をしたことはなかつた。中學にゐるころは、繪を描く外に、友だちと雑誌をこしらへたりした。鐵棒などにぶらさがつたことは、たゞの一度もなかつた。それが、兵隊となれば、さうはいかぬ。私の一番困つたのは器械體操であつた。鐵棒にぶらさがつたが最後、びくとも動かないのだから、自分ながら愛想がつきてしまつた。軍曹のKさんは、ある日、私にかう言つた。

「候補生。器械體操が出来なくてどうするのか。ゆくゆく兵卒に教へるなどといふことはとても出来ぬぢやないか。やる氣になりさへすれば出来ぬことはない。しつかり勉強せんといかん。」

私は、全くKさんの言ふとほりだと思つた。

私は、その夜から床を抜け出て、器械體操場へいつた。そこは舊城の内濠の側にあつて、女が石橋から濠へ下りて來て水際で



舊城
伊豫の松山城

泣くとかいふ恐しい話のあるところである。だから夜中だれもこゝへ行くものはない。私は鐵棒に飛びついて、どうかして足でも掛けて見ようと思つた。しかしそれは徒勞であつた。城の森の中では、ほうくくと何か鳴いてゐる。何だかわからぬ音が、ときどき森の中や、濠の中でするので、その度毎に私はひやりとした。何度となく鐵棒に飛びついたら、私も疲れるばかりで、追々に體が動かなくなつた。諦めて歸つて来て、こつそりと床にもぐり込む。泣きたくなつたことが何度あつたかわからない。

雨の降らぬかぎり、夜體操場へ出かけていつた。處が處だけに、月の晩は、いろくの影が私をびくつかせた。闇であれば闇で、目の前に何か突つかゝつて来るやうな氣がした。ときどき鐵棒に飛びつき損つて、ころんだり、頭を打つたりした事もあつた。鐵棒の柱にもたれて、何度泣いたか知れなかつた。私は鐵棒をすかして見ながら、蛙のやうに飛びついた。けれども、私の足には鉛の棒でも仕込んであるのか、少しもあがらなかつた。そして、徒らに腕をしやくつたり、顔をしかめたりするだけであつた。

十日たつても、十五日たつても、足があがらなかつた。十何日目の夜であつた、どういふはずみであつたか、足が棒にかゝつて、ひよいと軽く、猿のやうに體があがつた。だれかが突上げてくれたやうに思つた。私はふらくしなから、しばらく鐵棒の上で四方を眺めた。化物でも何でも來いといふ氣になつた。折柄、半圓の月が、城の松の上にかゝつてゐた。私の足は、一方はまだ棒に懸つたまゝである。そして、一方はぶらりと垂れさがつてゐる。兩腕は臂を立てて、一生懸命に棒に立ててゐる。何だか體が宙に懸つてゐるやうで、下を見ると、地面がだんく下_へに沈んでいくやうに見える。

次の夜が來た。ゆうべの呼吸でうまくやらうと、慎重な態度で飛びついた。しかし、見事を失敗であつた。二度、三度續ければ續けるほど、尻が追々に重くなつた。しかし、私は休まなかつた。すると、三度に一度は足がかゝるやうになり、私の伎倆は、自分ながら、何だか頼しく思はれるやうになつた。ある日、私はK軍曹から呼ばれた。Kさんは、「このごろ候補生は毎晩遅くどこかへ出て行くといふ評判だが、事實か。」といつた。

私はこれを聞くと、涙がにじみ出て來た。そして、何とも言はないで立つてゐた。すると、Kさんは、

「候補生は器械體操場にいつてゐるのだらう。」
と言つた。

私は、Kさんが、どうしてこんな事を知つてゐるのかと驚いた。

「はゝ。」

と言つてKさんの顔を見上げた。

Kさんは暫く黙つてゐた。

「候補生。わしのいつたことをよくきいてくれた。わしはこの十日前、候補生が毎晩ゐないといふことを聞いた

ので、それから氣をつけてゐると、成程、候補生は床を抜けて出て行く。ついていつて見ると、器械體操場なのだ。」
私の頬には涙がとめどなく流れてゐる。Kさんの前でなかつたら、聲を揚げて泣いただらう。

「それから、わしは、毎晩のやうに候補生のあとについて行つたのだ。候補生がいくらしても鐵棒にあがれないので、餘程出て行つて教へようかと思つたが、候補生の熱心で、きつと今に出來ると思つて、わざと蔭で見てゐた。」
私はKさんの前に倒れさうになつた。Kさんがこんなにまで思つてゐてくれたかと思ふと、たまらなくなつた。
「このごろは大分うまくなつた。もう一息だ。」

Kさんは聲をうるませながら、私の肩をたゝいた。

私は、其の後、少尉になつた。

Kさんには、その後十年も逢はない。ところが、このごろ突然函館にゐるといつて手紙をくれた。

私は、今にKさんの恩を忘れてゐない。(煙幕)

一四 吾が輩の運動

夏目漱石

夏目漱石
名は金之助
英文學者
小説家
江戸生
大正五年歿
年五十

吾が輩は近頃運動を始めた。如何なる種類の運動かと不審を抱くものがあるかも知れないから、一寸説明しよう。吾が輩は不幸にして器械を持つことが出来ない。だから

ボール
Ball
バット
Bat

ボールもバットも取扱ふことが出来ない。次には金がな
いから買ふわけにいかない。此の二つの理由からして、吾
が輩の選んだ運動は、一文いらす器械なしと名づくべき種
類に屬するものだと思ふ。
主人の庭は竹垣を以て四角にしきられてゐる。縁側と平
行してゐる一邊は八九間もあらう。左右は雙方とも四間
に過ぎぬ。吾が輩のはじめた運動は、垣巡といつて、この垣
の上を落ちないやうに一周するのである。これはやり損
ふこともまゝあるが、首尾よくいくと御慰になる。ことに
處々に根を焼いた丸太が立つてゐるから、一寸休息に便宜
がある。今日は出来がよかつたので、朝から晝までに三遍

やつてみたが、やるたびにうまくなる。うまくなるたびに面白くなる。たうとう四遍繰返したが、四遍目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間ばかり向ふに列を正してとまつた。

「これは推參な奴だ、人の運動の妨をする。ことに何處の鳥だか籍もない分際で、人の堀へとまるといふ法があるものか。」と思つたから、通るんだ、おい、退き給へ。」と聲をかけた。眞先の鳥は此方を見て、にや〜笑つてゐる。次のは主人の庭を眺めてゐる。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いてゐる。何か食つて來たに違ない。吾が輩は返答を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つてゐた。鳥は通稱

を勘左衛門といふさうだが、成程勘左衛門だ。吾が輩がいくら待つてゐても、挨拶もしなければ飛びもしない。吾が輩は仕方がないからそろ〜歩きだした。すると、眞先の勘左衛門がちよいと羽をひろげた。やつと吾が輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向きから左向きに姿勢を更へただけである。

此の奴め、地面の上なら其の分に捨置くのではないが如何にせん、只さへ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしてゐる餘裕がない。といつて、また立ちどまつて三羽が立退くのを待つのもいやだ。第一、さう待つてゐては足がつかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな處へ

はとまりつけてゐる。従つて、氣に入ればいつまでも逗留するだらう。こつちはこれで四遍目だ。只さへ大分勞れてゐる。況や綱渡にも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。

何等の障碍

物がなくて

さへ落ちん

とは保證が

出來んの、こんな黒裝束が三個も前途を遮つてゐては容易ならざる不都合だ。愈となれば、自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそさうしようか。敵は大勢の事ではあるし、殊には餘り此の邊には見



猫
筆石漱日夏

馴れぬ人體である。嘴がおつに尖つて、何だか天狗の申子の様だ。どうせ質のいゝやつでないには極つてゐる。退却が安全だらう、餘り深入をして萬一落ちでもしたら、尙更恥辱だ。

と思つてゐると、左向けをした烏が「阿呆」と言つた。次のも眞似をして「阿呆」と言つた。最後の奴は御丁寧にも「阿呆、阿呆」と二聲叫んだ。如何に温厚なる吾が輩でも、これは看過出來ない。第一、自己の庭内で烏輩に侮辱されたとあつては、吾が輩の名前にかゝはる。名前はまだないからかゝはりやうがなからうといふなら、體面にかゝはる。決して退却は出來ない。諺にも「烏合の衆」といふから、三羽だつて存

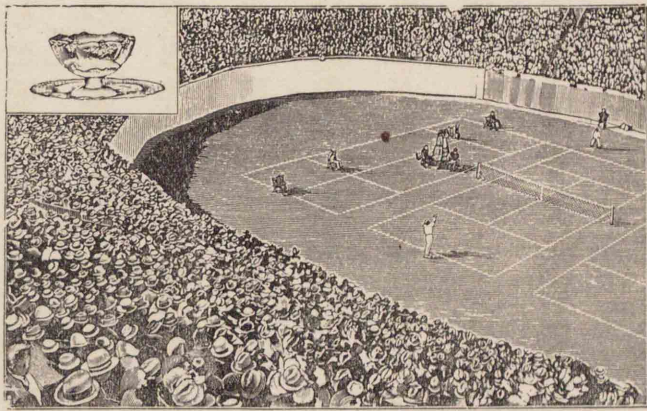
外弱いかも知れない。進めるだけ進め。と度胸を据ゑて、そのそ歩き出す。鳥は知らん顔して、何か御互に話をしてゐる様子だ。愈、癩癩に障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目に合はせてやるんだが、残念なことには、いくら怒つても、のそくとしかあるかれない。漸くのこと、先鋒を去ること約五六寸の距離まで来て、もう一息だと思ふと、勘左衛門は申しあはせた様にいきなり羽ばたきをして、一二尺飛上つた。其の風が突然吾が輩の顔を吹いた時、はつと思つたら、つい踏みはづして、すんと落ちた。これはしくじつたと、垣根の下から見上げると、三羽とも元の處にとまつて、上から嘴を揃へて、吾が輩の顔を見おろしてゐる。圖太い奴だ。睨みつけてやつたが、一向利かない。背を圓くして少々唸つたが、益、駄目だ。俗人に靈妙なる詩の意味が分らぬ如く、吾が輩が彼等に向つて示す怒の記號も何等の反應を呈しない。考へて見ると無理のない所だ。吾が輩は今まで彼等を猫として取扱つてゐた。それが悪い。猫なら此の位やれば慥かにこたへるのだが、生憎相手は鳥だ。鳥の勘公とあつて見れば、致し方がない。機を見るに敏なる吾が輩は、到底駄目と見て取つたから綺麗さつぱりと縁側へ引上げた。(吾輩は猫である)

Sportsmanship
スポーツマンシップ

てゐる。圖太い奴だ。睨みつけてやつたが、一向利かない。背を圓くして少々唸つたが、益、駄目だ。俗人に靈妙なる詩の意味が分らぬ如く、吾が輩が彼等に向つて示す怒の記號も何等の反應を呈しない。考へて見ると無理のない所だ。吾が輩は今まで彼等を猫として取扱つてゐた。それが悪い。猫なら此の位やれば慥かにこたへるのだが、生憎相手は鳥だ。鳥の勘公とあつて見れば、致し方がない。機を見るに敏なる吾が輩は、到底駄目と見て取つたから綺麗さつぱりと縁側へ引上げた。(吾輩は猫である)

一五 スポーツマンシップ

戦
 大正十年米國に於ける庭球デグイスカップ戦
 ニューヨーク
 New York 米國東部の大都會
 フォーレストヒル
 Forest Hill
 グラウンド
 Ground
 ファン
 Fan 運動競技の熱狂的見物人



清水チルデン兩選手の手合試

戦の幕は切つて落されました。こゝ、ニューヨークを距る三十二軒、理想的運動場として有名なフォーレストヒルの清らかなグラウンドの上には、白線が美しく浮いて、何となく純化されさうな氣分が漂つてゐます。米國の老幼男女は勿論、世界各國のファンは、ひしとばかりにグラウンドのまはりにつめかけて、この展開された場面に、兩選手の出場を待構へてゐました。チルデン君の上

清水君
 名は善造
 三井物産會社員
 群馬縣箕輪町生

テニスコート
 Tennis-court
 庭球場

に幸あれかしと祈る人の心と、清水君の上にと祈る人の心とが、平和の光の中に交錯してゐました。この光の中に、この無聲の應援の中に、凜とした決意と慘澹たる苦心とを想はせつゝ、微笑を浮べて、兩選手はテニスコートに現れました。身長百六十五糎の清水君が、百八十八糎のチルデン君に向ふのですから、まるで子供が大人と試合をするやうであります。観覽席の人々は、異口同音に「氣の毒だが、清水君は駄目だらう。」と囁きあつてゐました。火蓋は切られました。隙を窺ひ虚を衝く、さながら龍虎の争です。秒一秒、チルデン君と清水君との球は、牙えて來ました。観覽者は球の動くがまゝに、その瞳を忙しく右に左

に動かしてみました。とある瞬間、一心不亂に見入つた彼等の瞳に、忽ち、チルデン君の片足迄らして取亂した姿が映りました。彼等ははつと思ひました。この時です、清水君がチルデン君の血走つた眼の前、適當の位置に、柔かい、程のよい球を送つてやつたのは。この刹那に於ける清水君は、チルデン君に對する任俠の精神に燃えて、自己の優勝に對する名譽の感情も、自尊の精神も全く打忘れてしまつたのでした。

私
「スポーツマン
の精神」の著者
矢島鐘二

「ミスター、シミッツ」の歡呼の聲と共に、米人三萬の手は林の如く一齊に振上げられました。私は此の一刹那「あゝ清水君も清水君だが、米人も米人だ」と深く感じました。初めコ

上州長脇差
昔上野國で長い
脇差をさして往
來した博徒の稱

ートに出た時、チルデン君の眉宇には清水君に對する侮蔑の情があり、と見透かされたので、心ある米人は、その態度に少なからず不安の念を懷いてみました。然るに、清水君は、出場早々、この冷たい侮蔑に報ゆるに、温情春の如き優しい球を以てしたのです。この親切は電氣のやうに米人の胸に響いて、彼等の心の底から感激を涌上らせました。英人は、日英同盟の舊誼もあり、且は日本の應援者の少ない關係も手傳つてか、すつかり清水君最眞になつて、盛に同君に拍手を送りました。當時ニューヨークには群馬縣人が五十五人居りましたが、彼等は所謂上州長脇差の氣象から、此の日は總動員で應援に出かけました。これら敵味

上泉伊勢守
 名は秀綱
 劍道神陰流の開
 祖
 上野國箕輪生
 永祿頃の人

デヴィスカップ
 米國の富豪デ
 ザイスが各國選
 手の陸球競技に於
 ける優勝者に贈
 ることを例とし
 てゐる大形精巧
 のカップ

方總掛りの歡呼は、單なる清水君の妙技に發したのではな
 くて、その尊い任侠の精神に對する力強い感激に發したの
 であります。清水君と同郷の劍聖たる上泉伊勢守も、定め
 し「でかした、清水」と叫びつゝ、莞爾として笑を地下に含んで
 ゐる事でありませう。

時はこの上ない大事な場合であります。清水君が五・六・七
 八の四箇月にわたり、十二箇國の選手を薙倒して最後の決
 勝に入つた時であります。若し今明二日間の米選手との
 競技に於て勝を制し得たならば、日本で最初のデヴィスカ
 ップを獲得することが出来るのであります。この時に當
 り、チルデン君の失策に對して、同情に充ちてゐる優しい球

をその手許に送つた清水君は、實に偉いではありませんか。
 清水君が我は我にして我にあらず、實に神州男兒を代表し
 て立つてゐるのであるといふことを自覺して此の態度を
 取つたのは、實に敬服の外はありません。

人格の修養は大切であります。がしかし、いきなり釋迦や
 孔子の眞似をしようと思つても、私どもにはなかく、むづ
 かしい。私どもに取つて一番近路の修養法は、お互に親切
 同情を以て相接するといふことであります。「武士は相見
 互」といひ、「その敵を愛せよ」といふ語は、誠に尊い教訓であり、
 又永久の眞理であります。時代は如何に推移しませうと
 もフォーレストヒルにおいて發揮された清水善造君のそ

頼山陽
 名は襄
 安藝の人
 儒者
 文章家
 天保三年(西暦)
 年五十三
 歿
 謙信
 上杉氏
 名は輝虎
 戦國時代越後の
 武將
 天正六年(三三六)
 卒
 年四十九
 武田信玄
 名は晴信
 戦國時代甲斐の
 武將
 天正元年(三三三)
 卒
 年五十三
 今川氏眞
 義元の長子
 駿・遠・参の領主
 慶長十三年(三六
 〇)卒
 年七十七

の敵に對する任侠の態度と、貴くも美しいその球の精神とは、蓋し世界庭球の歴史に特筆大書せられて、永久に燦然たる光輝を放つてありませう。これ獨り我が清水君の名譽であるのみならず、實に我が日本男兒の名譽であります。

(矢島鐘二著、スポーツマンの精神に據る)

謙信ノ義勇

頼山陽

弓箭ノ争

武田信玄、國海ニ濱セズ、鹽ヲ東海ニ仰グ。今川氏眞、北條氏康ト謀リテ陰カニ其ノ鹽ヲ閉ヅ。甲斐大イニ困シム。上杉謙信之ヲ聞キ、書ヲ信玄ニ寄セテ曰ク、聞ク、氏康、氏眞、君ヲ

北條氏康
 氏綱の子
 小田原北條氏第
 三世
 元龜元年(三三〇)
 卒
 年五十六

北條氏政
 氏康の長子
 小田原北條氏第
 四世
 天正十八年(三五
 〇)豊臣秀吉に攻
 められて自殺し
 た
 年五十三
 長篠の役
 天正三年武田勝
 頼が徳川氏の將
 奥平信昌の守つ
 てゐた三河の長
 篠城を圍み徳
 川織田の聯合軍
 のために敗れた
 戦をいふ



高野上 杉山無量院 謙信藏

困シムルニ鹽ヲ以テスト。不勇不義ナリ。我、公ト争フ。争フ所ハ弓箭ニ在リテ米鹽ニ在ラズ。請フ、今ヨリ以往、鹽ヲ我が國ニ取レ。多寡ハ唯命ノマ、ナリ。ト。乃チ賈人ニ命ジ、價ヲ平カニシテ之ヲ給セシム。

好敵手

信玄卒ス。北條氏政、使ヲ馳セテ之ヲ謙信ニ告グ。謙信方ニ食ス。箸ヲ舍テテ歎ジテ曰ク、吾ガ好敵手ヲ失ヘリ。世復此ノ英雄男子有ランヤ。ト。因リテ潸然トシテ流涕スルコト久シ。長篠ノ敗ニ、武田氏ノ老臣、宿將



武高 田野 信成 信慶 院 玄藏

多ク死ス。越後ノ將士謙信ニ説
キテ曰ク、甲斐ノ兵新ニ敗ル。乗
ズベキナリ。ト。謙信曰ク、我、信玄
ト數十戦シテ取ルコト能ハザリ
キ。其ノ死スルニ及ビテ、弱子ヲ
侮リ、敗ニ乗ジテ之ヲ取ラバ、何ヲ

以テカ天下ニ對セン。ト。 (原文一日本外史)

相馬御風

名は昌治
文學者
明治十六年新潟
縣糸魚川町生

一六 田家の朝

相馬御風

笥をおちる水の音を聴きながら、いつとはなしに深い眠に
沈んでゆく。——さうした田家の夜の静けさも懐かしいが、

それ以上に、私は朝の寐覺めに笥の水の音を聴くすがく
しさを好む。

笥の水の音は、田家の夜と朝とを詩味あらしめる爲には、な
くてはならぬ要素のやうに私は思つてゐる。それは僅か
に細い一本の竹筒の口を漏れる水の音でしかないが、しか
も、何といふ大きな魅力をそのうちに藏してゐることであ
らう。それが、一家の者の生命をつないで行く上になくて
はならぬ貴いものであることは言ふまでもないが、それを
外にしても、私たちには、山の水を取入れる爲の笥を持つた
田家の詩味が、たまらなく懐かしくも又羨ましくも思はず
にはゐられぬのである。

朝の寐覺めに我知らず耳を傾ける筧の水の音のすがくしさ。それが筧を落ちるのでなくて、すぐに山腹の岩間からことくと流れ出る泉であれば、その音のすがくしさには神祕な味ひさへも加つて、私たちの心に一層貴い静けさを與へてくれる。

水の音を聽きながら眠り、水の音を聽きながら目覺めた刹那の心の静けさは、田家に住む人々に與へられた大自然の最も大きな恩惠の一つである。

私は嘗て或山奥の村家にとめてもらつたことがあつた。その時もやはり、私の寢てゐる枕に近く、筧の落ちる水の音

がしてゐた。安らかな眠から覺めたばかりの私の耳に、その水の音は、おのづと爽かな響を傳へた。私は何といつて見やうもないすがくしさと、静けさと、安らかさとに心身を抱かれながら、その水の音に聽きほれてゐた。

部屋の中はまだ暗かつた。しかし私は、それが眞夜中であるか、朝であるかといふことさへも考へなかつた。私はただうつとりと、安らかな寐覺めのこゝろよさにひたつてゐた。

その時、ふと、私はどこからともなく響いてくる鈴の音を聞いた。そして、それが馬の頸に下げられた昔ながらのあの鈴の音であることを、私はすぐにはたしかめることが出来た。

じやらんくく…
鈴の音は段々近づいて來た。それにつれて、ばつたんく
といふ藁の杵をはいた馬の足音も刻々に近く聞かれるの
であつた。

その馬の鈴の音と足音とが、はじめて私に朝を感じさせた。
「あ、もう草刈に行く人がある。夜が明けたんだな。」
さう思ふと同時に、私は起きあがつて、雨戸を明けにかゝつ
た。

あの時のすがくしかつた氣持を、今でも私は忘れること
が出来ない。

田家に住む人々は、いづれも早起である。若い人たちは、日
の出る前にもう山の草刈から戻つて來る。老人たちの朝
飯前の仕事は藁たゝきと草鞋づくりとである。

とんくく…
朝まだ暗いうちから、藁をたゝく槌の音があちらでもこち
らでもする。たまには、その音を拍子にして唄をうたつて
ゐる人もある。
とやでは、雞が盛に鳴いてゐる。

山家に泊つて、早朝谷川へ顔を洗ひに行く氣持も、私にはた
まらなく懐かしい。

清流に口をすゝぎ、顔を洗ひ、頭をひやすことの快さはいふまでもないが、私はそれ以上に、清流に口をつけてすぐに流を飲むことの快さを愛する。

草の上に、又は岩の上に寝そべり、顔を清流の上に差出して流に口づける。水は容易に口の中にはひらないものであるが、しかし、さうして飲む水の味と、手や何かで掬つて飲む水の味とは、まるで違つてゐるやうな氣がする。「流を飲む。」さうした氣持だけでも既に嬉しいのである。

手で掬ひあげた水に曉の空の光の映つた感じもいゝ。

(郷土に語る)

一七 明月の影

僕が十六の年の夏であつた、休暇になると、すぐに歸省した。僕が歸る二三日前から、田舎の僕の家では、風呂場の屋根があまり破れたので、その葺換を始めた。屋根の出來あがるまで、風呂桶を背戸の杉森のほりに持出して湯を立ててゐた。僕が何日の夕方歸るといふ葉書を出して置いたので、母は東隣の三吉さんを頼んで、風呂をたてて待つてゐてくれた。夕方無事に家に着いた。父母は大喜で僕を迎へてくれた。僕は靴や風呂敷包を戸棚の前に投出して、母に導かれて杉森の邊の風呂場へ行つた。

コスモス
Cosmos

三年ぶりで歸省したせぬか、庭の柿の木や、桐の木や、兄と一緒に植ゑた栗や、妹と其の下で遊んだ葡萄棚や、お稻荷様の側の紫陽花や、父が仕立てたといふコスモスや、有つたものは成長し、無かつたものはふえて、まるで僕の家、庭とは思はれない程に様子が變つてゐる。

淡青い夕餉の煙が緩くたなびいてゐる。向ふに村長の家の燈火が一つ見える。三吉さんの家の馬が嘶く聲も聞える。風呂桶の蓋を取つて入らうとした。濛々とあがる湯氣の中に、玉のやうな月影が靜かに沈んでゐた。仰げば十五夜の月は天に懸つて、杉森をも、我が家をも、風呂桶をも、僕の身體をも白く照してゐる。

僕は月の宿つてゐる風呂桶にはどうしても入ることが出来ないうで、しばらくそれに見とれてゐた。やがて靜かに手を入れると、眞圓な月影が小波のためにさらさらと崩れる。形がなくなる。又しばらくすると、湯の面が平らになるにつれて、もとの通り玉のやうになる。此の時、僕は實に繪にもかけぬ美に打たれた。思ひきつて此の明月の影を二つに割つて、月と共に一つ湯に入つた。月は大空に光を放つて笑つてゐる。

白い月の光を浴びて靜かに湯の中に冥想してゐると、杉森の叢にすだく蟲の音が實に面白い。體を洗はうとして手拭を動かすと、其の音と共に蟲の音がはたと鳴止む。が靜

行水の
上島鬼貫の句

遼陽
滿洲の盛京省に
ある
明治三十七年八
月二十三日から
九月三日までか
かつて我が軍は
ロシア軍と戦ひ
終に遼陽を占領
した

かに體を湯の中に沈めてゐると、やがてまた涼しい蟲の音
がまるで銀の鈴を振るやうに聞えて来る。僕は此の時は
じめて、
行水の捨てどころなし蟲の聲
といふ句の味ひを悟つた。
間もなく母が手拭を冠つて野良仕事の支度のまゝ來られ
た。久し振だからといつて背中を流して下さつた。母は
僕の背中を流しながら、遼陽で戦死した兄の事などを語ら
れて、たつた一人の僕の成功を急がれた。
あゝ、僕の母も父も、はや五十の坂を越してゐる。僕は熱い
涙をおとした。

天を仰げば、明月は老いたる母と瘦せたる僕とを靜かに照
してゐる。

蟲は鳴止んで、杉森はしんくとしてゐる。

風呂の中には、月がまだ玉の様な影を沈めてゐる。

僕は其の後、何處で月を見ても、何時月を見ても、此の夜の月
を思ひ出さぬことはない。(作文三十三講)

一八 富士登山

荻原井泉水

お山は實に鮮かに晴れてゐた。夕陽の色どりを失つて、た
だ黒く隆々と盛りあがつた偉大な土の塊が、却て彫刻的な
尊嚴を以て仰がれた。空は硝子のやうに透明で、ちぎれ雲

荻原井泉水

名は藤吉

俳人

明治十七年東京

市生

の影一つさへなかつた。晝の光が消失せたにもかゝらず、空氣そのものが光を持つてゐるやうに、薄青く暮れずにゐた。路はお山へ向けて眞直についてゐた。馬は慣れた道を心得顔に、自分の好きな歩調で私たちを運んでゐた。こゝらの裾野には小松が多かつた。小松の中には秋草が様々に咲いてゐるらしいが、丈の低いのは皆夕の色に埋れてしまつて、春の高い女郎花と、路傍に近く咲いてゐる月見草とだけが暮残つてゐた。ふと西の空を見ると、今しも現れた明星が、たつた一つ、ばつちりと光つてゐた。それは此の限もない野の廣さを支配する神の灯かとも見えた。又此の山の昔ながらの尊さを私たちに暗示する表象かとも



富士の裾野(吉田口)

思はれた。私は、だんくくと薄れる靄に包まれてゆくやうなあたりの景色を馬上から眺め、やがて眼をうつして明星に見入つた。そのとき、何といふ事なしに、涙ぐましいほど美しく寂しい感激が、心にこみあげて來るのを覺えた。

「お、月が……」私は覺えず馬上でかう叫んだ。それは、東の空に低く研ぎすまされた、まん圓い月が、玲瓏と搖ぎ出た所で

あつた。月が出ると共に、景色の調子はすべて一變した。今まで一様に薄青かつた空や裾野はくつきりとして、光と影との二つに分れた。空は朗々とした光澤を帯びた。そしてお山はいよゝゝ黒く大きな姿を以て出現した。その半腹から上の方には、小さな寶石のやうな灯が點々として鏤められてゐた。それは石室いしむらの灯であつた。路の上にも白い光が流れて來た。そして私たちの七頭の馬が長い黒い影を投げはじめた。

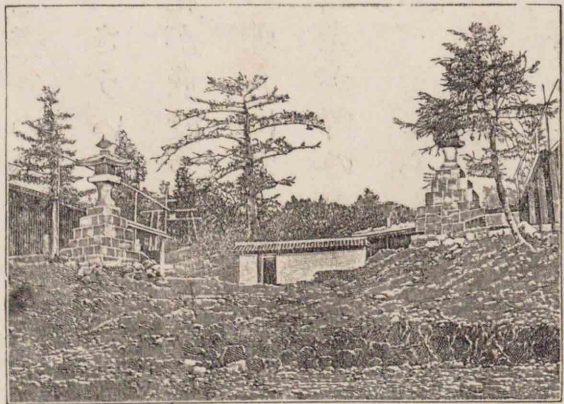
馬返の茶屋に着いた時は、夜氣を感じるほどだつた。「これから山も高くなるし、夜も更けるから」と強力がいふので、私たちはメリヤスの肌着を着込んだ。櫓ほたの明りの暗い手元

で、饅頭を一杯づつ食べた。そして又めいゝゝの馬に乗つ

た。「今夜のお山はいゝぞ」「こんな日和は今年になつて初めてだ。」馬子と茶屋の主人とが、かう話してゐた。

一合目から上は樹の茂みがある。月は大分高くなつたらしいが、枝がこんもりとかぶさつてゐるので、路は暗かつた。先

に立つて行く馬子が一人、提灯をつけて馬を導いて行く。後の馬はたゞ先の馬に續いて、暗い中を進むのであつた。



馬返
(口田吉)

勾配もだんく急になつた。それに岩や石が多いと見え、馬の蹄の音がかつくと鋭く鳴つて來た。暗さの爲か、急な登りの爲か、馬は時々躓いた。さういふ時には、蹄鐵から火花が飛散つた。しかし、樹の枝の疎らになつてゐる處では、月の光が雪のやうに葉の上に輝いて、そこらを明るくした。又ふと茂みのとだえてゐる處では、月の光が瀧のやうになだれ落ちて、路の上に溢れてゐた。さういふ處を、馬は勇ましく歩を運んだ。



三合目から望んだ富士山頂

三合目、四合目の室はもう戸を閉ぢてゐる。その前をひつそりと乗りながら過ぎた。五合目に着くと、馬は心得たやうに、びたりととまつた。樹帯はこゝらで全く盡きて、月はお山一面に照つてゐた。私たちは馬を下りた。馬はしつとりと汗ばんで、水を浴びたやうに濡れた肌を月にさらしながら、おとなしく足を揃へてゐた。私たちはその室にはひつて、熱い茶をうまく味はつた。そして用意して來た夕食の辨當を開いた。室には、泊つてゐる人が、蒲團を一枚かけて、ごろくと寝てゐた。

五合目は「天地之境」と稱せられてゐる。如何にも、このあた

吉田口
山梨縣南都留郡
福地村上吉田
富士山東北麓の
登山口

船津
山梨縣南都留郡
船津村
富士山の北麓
河口湖畔にある

りまで登ると、地上を離れたといふ感じがする。吉田口から裾野を來る時、薄い夕霧がしつとりと襲つて來るやうに思つたが、それはもや／＼とした白い雲となつて、こゝから見ると、低く裾野一面を蔽うてゐる。そのあなたに、吉田の町の灯がちらく／＼と光つてゐる。それよりもなほ遠くなほ幽かに見えるのが船津の灯であつた。馬と馬子とを返してから、私たちは強力を先に立てて、靜かに靜かに一歩々と踏んで登つた。この夜ふけの山を踏んでゐるものとしては、實に私たちだけであつた。鳥もゐず、蟲もゐず、死のやうな靜寂の中に、七人の金剛杖の音のみが、かちり／＼と岩にあたつて鳴つた。その杖は、五合目の室

で「天地之境」といふ焼印を押してくれたものだつた。月はまことによく冴えて、何の遮るものもない山の肌は、晝のやうに明るかつた。時計を出して見ると、十時を二十三分過ぎてゐるその針が、はつきりと月光に讀まれた。

自分の服にさはつて見ると、露でしつとりとしめつてゐた。蘆や笠は暑さを凌ぐために身につけて來たのだが、それが今では露を凌ぐ爲のものとなつた。山肌の岩や砂にすがつて生えてゐる僅かの青いもの——ほまつ 偃松や、あざみ 濱梨の木や、あざみ 蕪など——の葉にも露が光つてゐた。空を見ると、疎らな星が、大きな露の雫のやうにきら／＼してゐた。さうした星

濱梨
一に岩梨
富士や日光など
の高山に地を這
つて生えてゐる
葉は楕圓形
實は大豆の大き
さで甘酸ばい

が、ふつと流れて下界の方へ落ちたりした。こゝから見ると、白い雲が海のやうに浪立つ下界の方へ――。

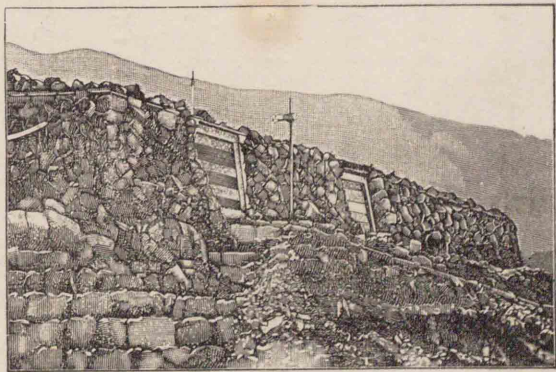
六合目の室はぴつたり閉ぢてゐたが、その前に差掛けのベンチが出来てゐる。そこへ腰をかけて休んだ。私は精進の宿を立つ時新しくかへて来た草鞋を踏切つたので、強力しやうりきの背から一足取出させて穿きかへた。室の戸があいて、ここに泊つてゐた男が出て来た。その男は崖の所へ行つて、あたりを見まはして、ふるくくと身ぶるひをして、「おゝい、月だな」といひつゝ、又室の戸をぴつたりと締めた。

ベンチ
腰掛
Bench
精進の宿
山梨縣西八代郡
上九一色村精進
なる精進湖畔の
宿

頂に近くなると共に路といふやうな路は無くなつてしまつた。人が踏んだあとの砂で、僅かにそれと知られるけれども、踏みかためられてはゐないから、足をかけると、さくりさくりと這つて、歩みは著しくはかどらなくなつた。「懺悔ざんげ懺悔――六根清淨――」登山の行者が唱へる此の言葉を、先へ行く者と後になつた者とが、お互に唱へかはして、心を引きしめあつたりした。

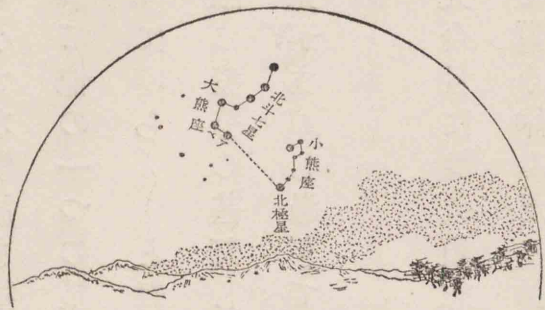
七合目を越して、八合目の室に入つて少し休んだ。時計を見ると、もう一時を過ぎてゐた。非常に睡いやうでもあつたが、こゝでなまじひに眠つてはいかぬと思つた。室の中

の爐では、木の枝を焚いてゐた。その煙が非常にけむくて、目から涙がぼろ〜と落ちた。やはり目が疲れてゐる爲だと思つた。室の一隅に幕を引いて別室のやうに仕切つて泊つてゐた外人の一群は、もう起きてゐた。頂上で御來迎を拜まうとするならば、そろ〜こゝを出なければならぬ頃だ。いつの間にか爐の傍に横になつて眠つてしまつてゐた強力の青年を呼起して、私たちは又登り始めた。



富士山八合目の石室

山に酔つたといふよりも、睡眠を奪はれたためであらう、頭がふらく〜する。さういふ者が私の外に一人二人あつた。自分は蘆を山の勾配のまゝに砂の上に敷いて、ごろりと寝て見た。砂の上には草一本の影もない。月はちやうど額の上に懸つて、いよ〜天心に澄みきつてゐる。頭をずっと仰向けにした視線の果に、北斗七星がきらきらと光つてゐる。私は其の一つをじつと見つめてゐた。



と、其の星がふらくくと動き始める、すうと流れるのではなく、小さな螺旋を描きながら踊つてゐる。不思議だなと思つて、他の一つの星を見つめた。すると、其の星も亦螢のやうにゆらくくと舞ひ始めた。これは幻覺だ。さう思ふと、眼の疲労の甚だしい事がわかつた。また月を見た。月の光がまぶし過ぎて、涙がにじみ出た。

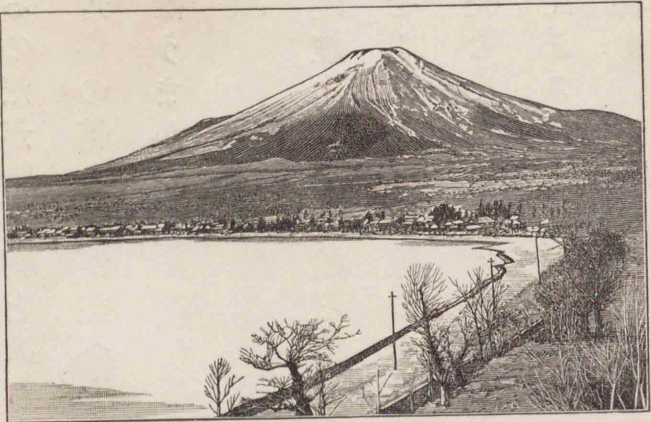
九合目には久須志神社といふお宮がある。そこへはひつて暫く休んだ。神官が二三人、なかく寒い。併し今朝は氷がはらないから。――などと、もう朝の言葉をかはしてゐた。さうして、私たちには、「こゝは日の御子といつて、東へ眞

正面の處です。こちらで御來迎をお拜みなさい。」といつたが、日の出までにはまだ二時間近くも間があるので、私たちは頂上を指すことにした。「頂上へ行く方は御祓まじをしていらつしやい。」神官はかういつて、祝詞をあげてくれた。それは、今日のお山へ詣でるよき人々の一族の平安を祈るといふ意味を、神代の言葉を集めて綴つた長いものであつた。そして、大きな御幣で、皆の並んで下げた頭の上をばさりくとはらつた。外へ出ると、これまで感じなかつた風が冷えくと動いてゐた。それが黎明の近いことを思はせた。又その風が、ふらくした頭を幾分かしつかりとさせてくれた。

山中湖
 山梨縣南都留郡
 福地村上吉田の
 東南八軒なる中
 野村にある
 五湖
 本栖湖
 精進湖
 西湖
 河口湖
 山中湖

月の光は漸く衰へ始めた。その上、路が東へ廻つた爲、西へ傾きかけた月が、頂の峯の陰になつてしまつた。光と影との差別は薄らいで、裾野の夕に見たやうな混沌とした青白い色が、一様に漂つて來た。その混沌たるものの中から、新しい光の生れるのを待つばかりになつた。下界は——殊に甲州に寄つた方は——雲がびつしりと鎖してゐた。その雲のはづれに、今までは雲と同じやうに白く見えてゐたものが、大きな勾玉の形をした湖水であるといふけぢめも、やつと明かに認められた。それが山中湖であつた。五湖の一として見残したこの湖を、私たちはかうして鳥瞰的に

眺め得たのであつた。



山中湖の北岸から見た富士

の室を早く立つて來たと見える人が、ちらほらと登つて來

頂上の室ではもう灯を消してゐたが、屋根の下はうす暗かつた。そこへ私たちは上つて、御來迎を待つことにした。じつとしてゐると、寒さはひしくと身に迫つて來る。手は凍え、吐く息は白く見えた。襦袢を借りてかぶる者もあつた。下

て、室はいつか一杯になつてしまつた。皆草鞋のまゝで上るのだが、脚と脚と入れちがへて餘地のないやうな處へ、牡丹餅の箱などが並べられた。名物といふ眞黒な甘酒だけは、うまかつた。

暁紅——朝の始る前の先觸として、かんがりとぼかし染にせられる地平線の赤さは、かうした高みから眺める時には、たゞに美しいばかりでなく、地上の物の一切の希望を語つてゐるやうな純潔な尊さに、にじみ出てゐる。「あゝ、ぢきに御來迎だ。」さういふ言葉が口々に傳へられて、室の中におた者も皆外に出た。大分明るくなつた岩の上には、霜がお

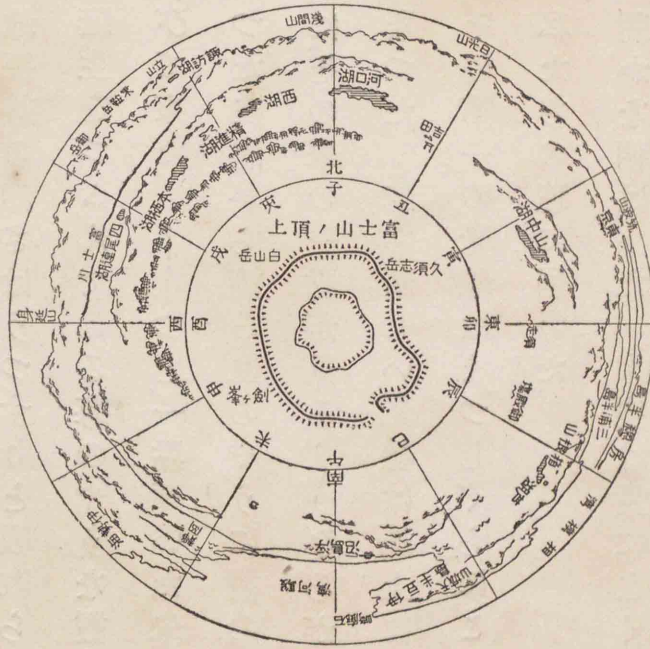
りてゐた。それを踏んで、寒さうな緊張した顔が並んだ。地平線の赤さは、うつすりと吸取られて、ある神聖なもの誕生をつゝんでゐる幕のやうな霞が、つや／＼しい光を帯びて來た。——つと、一點輝いた朱の色が、鋭い刃で突き破つた皮膚から滴る血のやうに霞の幕を押分けたと思ふ間に、その朱の一點が見る／＼ひろがつて、麗しい太陽の姿となつた。忽ち、新しい光線は地上に、又天上に漲つて來た。その第一の光線は、まつしぐらに、この頂上に立並んでゐる私たちの瞳に届いた。

朗かな朝は來た。大空は實によく晴れてゐた。大地も實によく晴れてゐた。太陽を生んだ後の霞が消えた處に、煙

大島
伊豆半島の東方
海中にある島

三浦半島
神奈川県
の東南
方に突
き出
てお
る半島

江ノ島
神奈川県
の南方
鎌倉
の西
にあ
る小島



富士山ノバノマ
中野至製圖

線に沿うて目を移すと、小さく、しかもしづかに江ノ島が見え

の靡くやうに仄かに這つてゐるのは房總半島である。海は空と差別がないが、雲のやうに置かれた大島が、そこは太平洋の中だといふ事を示してゐた。その手前に、更に鮮かに一抹の線を引いてゐるのが三浦半島である。海岸



三保の富士 久保田米徳筆

馬入川 甲斐國桂川の下
 流 相模國を貫流し
 て相模灘に入る
 大磯 神奈川縣中郡大磯町
 愛鷹山 富士山の南麓に
 峙つ山
 駿東富士の兩郡
 に跨つてゐる
 天城山 伊豆半島の中央
 部に峙つ山
 三保松原 静岡縣安倍郡に
 ある名勝
 御前崎 駿河灣の西南に
 突き出た岬
 パノラマ Panorama

る。馬入川が見える。その右手は大磯であらう。小田原。熱海と思はれるあたりも、箱根や足柄の山々も、盤に水銀を盛つたやうな蘆湖が、外輪山の器の中に秘められてゐるのも、手に取るやうに見える。近くは愛鷹山の青い隆起を隔てて、天城山を中央とする伊豆半島が、ずうつと延びてゐる。その右には、洋々とした駿河灣が描き残された素絹の白さを以て光つてゐた。沼津原由子浦と順々に南を眺めると、蛇の這つたやうな富士川を越えて、三保松原が小さく清水灣を抱いてゐる。その先に突きでてゐるのは御前崎であらうが、そこらはもう霞んでゐる。私は此の大きなパノラマのやうな景觀に心を放つてゐた。

太陽はずん／＼と高く昇つて、強い、とろ／＼とした光線が、
靈山の絶頂から下界へ向けて擴がつていつた。(山水巡禮)

齋藤竹堂

名は馨

陸前の人

儒者

嘉永五年(五二)

歿

年三十八

清見寺

静岡縣庵原郡興

津町にある禪寺

興津

静岡縣庵原郡興

津町

薩陀山

静岡縣庵原郡に

峙つ山

蒲原

静岡縣庵原郡蒲

原町

田子浦

齋藤竹堂

清見寺ニ登リテ三保、松原ヲ瞰レバ、蒼翠滴ラント欲ス。蓮
峯朗カニ其ノ左ニ出デ、寔ニ一佳境ナリ。興
津ヲ經テ薩陀山ニ上ル。地高爽ニシテ、富嶽
ト相對ス。俯セバ則チ海波^{ケツ}ノ如ク、嶽影水
ニ落チ、上下相映ズ。此ヨリ蒲原ニ至ルマデヲ田子浦ト稱
ス。信ニ東海第一ノ勝ナリ。(原文一竹堂遊記)



映玉

一九 山の歡喜

河井醉茗

あらゆる山が歡んでゐる。
あらゆる山が語つてゐる。
あらゆる山が足ぶみして、舞ふ、踊る。
あちらむく山と、
こちらむく山と、
合つたり、
離れたり、
出てくる山と、
かくれる山と、
低くなり、

高くなり、
 家族のやうに親しい山と、
 他人のやうに疎い山と、
 遠くなり、
 近くなり、
 あらゆる山が
 山の日に歡喜し、
 山の愛にうなづき、
 今や
 山のかゞやきは、
 空いつばいにひろがつてゐる。
 (醉者詩集)

阿部次郎
 哲學者
 東北帝國大學教
 授
 明治十六年山形
 縣生

一昨々年
 大正七年
 輕井澤
 長野縣北佐久郡
 東長倉村の大字
 淺間山の南麓
 作者が避暑して
 ゐた地

二〇 月見草

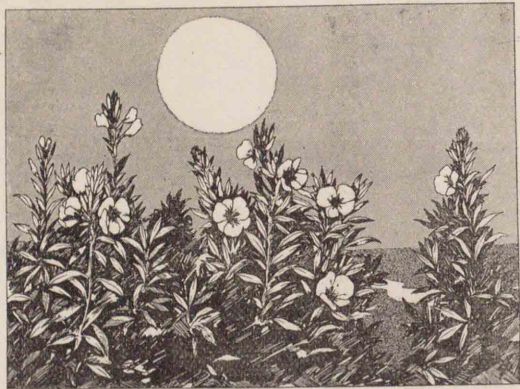
阿部次郎

月見草は私の好きな花の一つである。とりはなして言へば黄色は自分の特に好きな色の部類に屬してゐるものではないが、あの花瓣のやはらかさと、あの清新なあざやかさと、又その花の咲く夕暮や曉のすがくしさと、月見草のほのかな黄色をこよなく懐かしいものにおもはせるのである。

自分は一昨々年の夏、輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出来ない。朝まだ暗いうちに、狭苦しく満員になつてゐる停車場前の旅舎を出て、同宿のT君やM君と新舊兩

市街の間の野原を歩いた。月見草が曉に近く、いくらか萎れかゝつて隈もなく咲續いてゐる上を、山の霧が廣く流れてゐた。自分たちは言葉少なに並んで歩きながら、何とも言へず親しい氣持になつて、又旅舎に歸つた。

今自分の家にも一株の月見草がある。二三日前の夕暮、私は月見草の咲くところをまのあたり見た。二階の欄干に凭つて食後の煙草をふかしてゐると、庭の月見草の蕾が急にふくらんで來るのが見えるやうに思はれた。昔の人が蓮の花の開く音を聽いて悟をひらいたといふ話をかすかに想ひ起しながら、いそいで庭に出て、月見草の傍にしゃがんで見てゐると、如何にも今咲きかけてゐる蕾の幾つかが



月見草

ある。最初に花瓣を包んでゐる萼が後退りを始める。萼が開くと、卷かれてゐた花瓣が次第にふくらんで來て、不意に一ひらが急にはじける。さうすると、四つの花びらが一緒にふはりと開いて來て、遂に蕊を見せ、咲いてしまふのである。その咲きはじめに、ほのかな香氣が鮮かに鼻を撲つときの氣持は、なんとも言はれない。

明日の朝になれば萎んでしまふ果敢ない花ではあるが、咲く時の新しさは、それだけに格別なのかも知れない。

私のやうなものには、月見草の咲くのを見ても、固より悟は開けない。併し悟が開けなくとも、新しく咲く花を見まもる静かな愛の心は、本當にありがたいものであつた。

(北郊雜記)

吉村冬彦

本名は寺田寅彦
物理學者
理學博士
東京帝國大學教
授
明治十一年高知
縣生

二一 兜 蟲

吉村冬彦

まだ小學校に通つてゐた頃、昆蟲を集めることが友達仲間ではやつた。自分も母にねだつて、蚊帳の破れたきれて捕蟲網を作つて貰つて、土用の日盛にも恐れず、これを肩にかけて、毎日のやうに蟲捕に出かけた。蝶や蛾や甲蟲類かふちゅうの一番澤山に棲んでゐる城山の中をあちこちと、永い日を暮し

た。二の丸、三の丸の草原には、珍しい蝶や、ばつたが夥しい。少し茂みに入ると、樹木の幹にさまざまの甲蟲が見つかる。玉蟲たまむしこがね蟲、米搗蟲の種類がかずくゝゐた。強い草木の香にむせながら、胸を躍らせながら、こんな蟲を捕つて歩いた。捕つて來た蟲は熱湯や樟腦で殺して、菓子折の標本箱へ綺麗に並べた。さうして、此の箱の數の増すのが何よりの樂みであつた。蟲捕から歸つて來ると、からだは汗で浴びたやうになり、顔は火のやうであつた。「どうしてあんなに蟲好きであつたらう。」と、母が今でも昔話の一つに數へる。年を経て、色々な面白い事にも出あつたが、あの頃珍しい蟲を見つけて捕へた時のやうな鋭い喜は稀である。

今でも城山の奥の茂みに蒸された朽木の香を思ひ出すことが出来るのである。いつか城山の裾のお濠に臨んだ暗い茂みにはひつたら、一株の大きな常山木（じょうざんぼく）があつて、桃色が



かつた花が梢を一面に蔽うてゐた。散つた花は風に吹かれて、汀（てい）に朽沈んだ泥船に美しくちらばつてゐた。此の樹の幹には處々蟲の食ひ入つた穴があつた。穴

の中には細い木屑が蟲の糞と共に零れかゝつて、一種の臭氣が鼻を襲うた。樹の幹の高い處に、大きな見事な兜蟲（たうむし）がいかめしい角を立てて止つてゐるのを見つけた時は嬉し

かつた。自分の標本箱にはまだ兜蟲のよいのが一つもなかつたので、胸を轟かして網を上げた。少し網が届きかねたが、やう／＼首尾よく捕れたので、腰につけてゐた蟲籠（むしかご）に急いで入れて、包み切れぬ喜を抱いて森を出た。

三の丸の石段の下まで來ると、向ふから美しい蝙蝠傘をさした女が、子供の手を引いて樹陰を傳ひ／＼來るのに逢つた。町の良い家の妻女であつたらう。傘を持つた手に藥瓶をさげて、片手に子供の手を引いて來る。子供は大きな新しい麥藁帽の紐を可愛い頤に



兜 蟲

かけて、眞白な洋服の様なものを着てみた。自分の提げてゐた蟲籠を見つけると、母親の手を離れて覗きに來たが、眼を圓くして母親の方へ駈けて行つた。そして、袖をぐいぐい引つばつてゐると思ふと、又蟲籠を覗きに來た。母親が「早くお出でよ。」と呼ぶけれども、なか／＼自分の側を離れぬ強ひて連れて行かうとすると、道の眞中にしやがんでしまつて、たうとう泣出した。母親も途方にくれながら叱つてゐる。自分は其の時蟲籠の蓋を開けて兜蟲を引出し、道端の相撲取草を一本抜いて、蟲の角をしつかり縛つた。そして「さあ」といつて子供に渡した。子供は泣きやんで、きまりの悪いやうに嬉しい顔をする。母親は驚いて子供を叱り

ながらも禮をいつた。自分は何だか極りが悪くなつたから、黙つて空になつた蟲籠を打振り／＼駈出したが、嬉しいやうな、惜しいやうな嘗て覺えない氣持がした。其の後度々同じ常山木の下へも行つたが、あの時のやうな見事な兜蟲は、もう見つからなかつた。又あの時の母子にも再び逢はなかつた。(藪柑子集)

二二 水の都

大類伸

ヴェニスヴェニスは伊太利の有名な都市であつて、風景の美を以て世界に喧傳された水の都である。

此の都は北伊太利の沿岸で、ポーの河口に近い地點にある。

大類伸
 歴史家
 文學博士
 東北帝國大學教授
 明治十七年東京市生
 ヴェニス
 ポー Venice
 伊太利北部の
 川 東流してアド
 リヤ海に入る

Rialto
リヤルト

街は大きな潟の内にある島であつて、陸とは全く離れて居り、又海に向つては長く斗出した海峡によつて限られて居る。陸からも海からも攻めにくい要塞地で、潟の内は安全な一箇の城郭の様なものだ。街は其の潟の中央なるリヤルトの島に置かれてゐる。中世の初め、幾多の蠻族が伊太利を荒した時、人民の或者は逃れて此の險要な潟に據つて、こゝで漁業を營むことになつた。これがヴェニスヴェニスの草分である。此の地は軍事上險要な地であつたばかりでなく、其の潟は少なからぬ漁鹽の利を藏してゐた。ヴェニスの住民がおひひく發達した其の資源は、此等の利に依つて得たものである。そのみでなく、歐洲内地と東方諸國との

Venus
ローマ神話の
中にある女神
マラモッコ
Malamocco

交通の要路に當つてゐたので、遂には中世第一の商業市といはれるばかりの盛況を呈するに至つた。ヴェニスの發達は全く水の賜である。水あればこそ陸からも攻められずに安全な生活を營むことが出来、水あればこそ漁鹽の利を收めることが出来、水あればこそ更に四方に航海通商を試みる事が出来たのだ。その美しい風景も、また全く水の賜に外ならぬ。かくの如くにして、ヴェニスは全く水から生れたやうなものだ。ヴェニスの女神は水に浮ぶ泡から生れたが、ヴェニスの都も亦それに似たものといへよう。初め都は海に面した洲崎の一端なるマラモッコにあつたが、後に潟の中

ゴンドラ
ヴェニス特有
の半月形の
小舟
Gondola

央なるリヤルトの島に移つたのである。今は此の島全體が都となつて、其の間を縦横に多數の運河が通じてゐる。そして人は此の水の通りをゴンドラと呼ぶ古風な小船に乗つて往來する。

多くの人家は直ちに水に臨んでゐるから、戸口の石段は水に洗はれ、ゴンドラの船は直ちに此の戸口に着けることが出来る。他の都市では、けたましい自動車の警笛や、敷石を軋る轍の音で喧しいのに、ヴェニスでは、水を分けゆく静かな櫂の音が聞えるのみだ。文明の進歩した今日、かくの如き都市は、實に世界に稀である。

あゝ水に浮ぶヴェニスの都、寺院に宮殿に其の榮華を語る

大廈高樓が色さまゞの大理石に時代の古びを見せて、一灣の水、晝の静けさに眠る上に、蜃氣樓と見紛ふばかり浮び出るとき、或は夕日に赤く彩られた眞帆片帆の滑かなる水面をたゆたふとき、或は又遠く銀波の靡けるが如く、瀉の彼方を限る洲崎の間を分けて漁船の歸り來るとき、



ラドニゴのヴェニス

アドリヤ海

Adriatic Sea 伊太利半島の東にある海

小亞細亞

Minor Asia 亞細亞の西北

Asia 間 黑海地中海の

シリヤ

Syria 小亞細亞の南

埃及

Egypt 亞弗利加の東部

若しくは月靜かなる夜、ゴンドラの船歌面白く、水に映る街の燈火を櫂の先にかき亂して行くとき、水に浮ぶヴェニスの都の美しさは、如何に遊子の心を動かすであらう。朝の霞にも夕の霧にも、春夏秋冬、ヴェニスの美はすなはち水の美に外ならぬ。

併しヴェニスの水に負ふところは、たゞに其の美觀のみではない。ヴェニスは實に水の爲に立派な海港となることが出来たのだ。即ちその住民は、水を利用してアドリヤ海から遠く東に航し、小亞細亞、シリヤ、埃及の沿岸にも通商貿易を試みた。従つてアドリヤ海はヴェニスの爲には貴重なものであつて、これがなければあの様な發達は到底望ま

れなかつたのである。さればこそ、當のヴェニス人は、アドリヤ海をヴェニス市の夫と見たたのである。都を妻とし、海を夫とする、何と美しい想像ではないか。ヴェニスが繁榮を極めた時代には、以上の想像に基づいて茲に昔床しい儀式が行はれた。即ちヴェニスの町とアドリヤ海との結婚式である。それは市民が行ふ儀式の中で最も莊嚴華麗なもので、毎年一回づつ行はれた。此の日ヴェニスの長官は自ら花を飾つた政府の大船に坐乗し、後には多數の貴族の船を従へ、美々しい行列をつくつて悠々と海上に漕出した。かくて長官はヴェニス市を代表して黄金の指環を海中に投じ、アドリヤ海と千年の契を籠めるのであつた。

ベッカストリニ

Beccastrini

松村武雄

文學者

神話學者

文學博士

浦和高等學校教

授

明治十八年熊本

市生

伊太利

Italy ヨーロッパ南

部の王國

夫アドリヤ海と妻ヴェニス。一は人間の作つたもの、一は自然そのもの。自然なる海の夫は朝夕の潮の満干に洲崎の岸を洗ひ、リヤルトの島をおとづれて、千秋萬古何のかはりもないけれど、人間の作つた街の妻はその容姿が日に月に衰へて、今は當時の面影を見ることが出来ない。思うて此に至れば、誰しも多少の感慨なきを得ぬであらう。

(ヴェニスとフロレンス)

二三 ベッカストリニ

松村武雄

歐洲戦争では各國の間に多くの勇士が現れた。伊太利のベッカストリニの如きは、そのうちでも最も花々しい勇士

であつた。

フロレンス
Florence
イタリー中部
の都會

ミラン
Milan
イタリー北部
の都會

奥太利
Austria
ヨーロッパ中
部の共和國



ベッカストリニ

ベッカストリニは伊太利のフロレンス附近の貧しい家に生れた。彼は歐洲戦争の始るまでは、坑夫として炭坑に働いてゐた。しかし戦争が始る二年前、即ち一千九百十二年の秋に、ミランの工兵聯隊に入隊した。その時、彼は丁度二十歳であつた。

彼の屬してゐた工兵聯隊が派遣されたのは、敵國奥太利の國境に程遠からぬパスビヨ山附近であつた。この山は峨

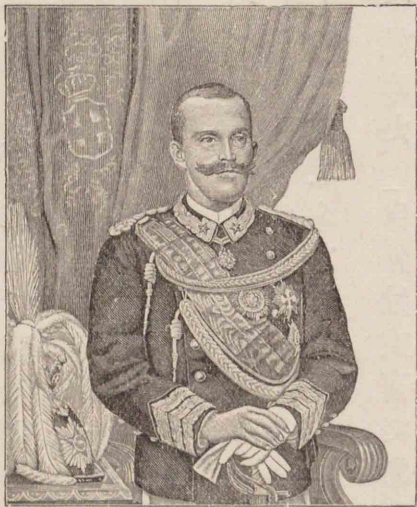
峨たる岩山で、樹木などはあまり生えてゐない荒涼たる禿山であつた。

彼の聯隊はこの山を隔てて、奥太利の敵軍と睨み合つてゐた。だから戦闘はいつでも塹壕や坑道の中で行はれた。こゝは全山が岩から成立つてゐるので、塹壕を掘ることも、坑道を造ることも、一通りの骨折では出来なかつた。彼の聯隊は、絶えず強い火薬を使つて、岩山を爆發させねばならなかつた。かくて彼の聯隊は、いつしか爆發隊といふ名で通るやうになつた。

ベッカストリニの前身は炭坑の坑夫である。だから、彼は塹壕を掘るにも、坑道を造るにも、人一倍すばしこく、目ざま

しい働をした。彼のさうしたすばらしい働は、やがて上官の目にとまつた。一日ベッカストリニは上官の前に呼出された。彼は何事が起つたかと思つて、心配しながら、不動

皇帝
Victor Emmanuel III
(1869—)
ウイクトル、
エンマヌエ
ル三世
1900年即位



世三第ルエヌマンエ、ルトクイヴ

「お前の働は大したものだ。で、皇帝陛下はお前を少尉に昇進させて下さつたのだ。今後は一層精出すやうに。」

の姿勢で上官の前に突立つた。上官は機嫌のよい顔をして、黙つて彼に一枚の紙を渡した。それはベッカストリニを少尉に任ずるといふ辭令であつた。

レコード
Record
記録

上官は嚴かな口調で、かう傳へた。ベッカストリニは夢ではないかと思つた。一兵卒が一足とびに將校になるといふことは、これまでにないことである。伊太利陸軍は今までのレコードを破つて、一兵卒を少尉に任用しようとしたのであつた。

ベッカストリニは本當に夢のやうな心持がした。彼は嬉しくてたまらなかつた。が、「しかし」と、ベッカストリニは考へ始めた。「自分は文盲である。手紙一本も、ろくに書けぬ男である。自分のやうなものが將校の列に入るのは、自分だけの恥ではない、伊太利陸軍の不名譽である。嬉しさのあまりに光榮ある伊太利の陸軍を汚してはならぬ。」ベッ

カストリニは、かう思つた。そこで、きつぱりした口調で、上官に、

「有難い仰ではありませんが、私は御辭退申します。」

と言つた。上官は非常に驚いた。そして、ベッカストリニの顔を睨みつけるやうにして、

「なにつ、辭退する。それはまたどういふわけか。」と詰つた。

ベッカストリニは、しづかに自分の考を話した。そして、自分が將校になつてもよいだけの修養が出来た曉に、改めて辭令をお受けすると言つた。上官は感に堪へないやうな顔をして、そのまゝ黙つてしまつた。

それからといふものは、ベッカストリニはもう死物狂であつた。彼はパスビヨ山の塹壕の中で、一生懸命に語學を勉強した。晝夜の別なく火薬を使つて岩山を爆發させたり、鶴嘴を搦んで地を掘つたりするのだから、身も心も打ちのめされたやうに勞れ果てるのであるが、ベッカストリニは氣を取直しては戰のひまなく、A B C から稽古を始めた。世に熱心ほど恐ろしいものはない。殆ど無學文盲であつたベッカストリニは、數年たゝぬうちに伊太利の文壇にもてはやされる文章を作るやうになつた。

ベッカストリニはたうとう隊長の代理として多くの兵士を指揮する身分となつた。その頃のことである、ベッカストリニは、一日部下を呼んで烈しい爆發藥の調合を命じた。そして自分はその側にあつて、仕事の監督をしてゐた。と、一人の兵士が、何を間違へたのか、くらくくと煮立つてゐる鍋の中にゼラチンを入れた。

「あつ、しまつた。」

ベッカストリニはかう叫んで、いきなり飛出した。そして大きな聲で、そこに群つてゐた部下に、

「逃げろ、大爆發だ。」

と叫んだ。部下の兵士たちは、彈かれたやうに、ぱつと飛びのいた。

ゼラチン
Gelatine

ベッカストリニは飛鳥のやうに身を躍らせて鍋を掴むなり、谷底めがけて、どうと投落した。が、もう遅かつた。鍋はベッカストリニの手を離れた瞬間に、凄じい響を立てて爆発した。ベッカストリニは聲をも立て得ないで、地面にぶつ倒れた。あゝ、何といふ光景だ。彼の眼は二つともぐぢやぐぢやになつた。左の腕は肩の處から根こそぎ振ぎとられた。そして、右の手先はさゝらのやうに無慙に裂けて、からだはすつかり不具になつた。しかし大勢の部下は彼の命がけの働によつて救はれたのであつた。ベッカストリニは、思ひがけない不具者になつてしまつたので、除隊となつて癡兵院に收容された。癡兵院に入つて

タイプライター
Typewriter

も、ベッカストリニは決してむだに日を送ることはなかつた。彼はまづタイプライターを打つことを稽古し始めた。彼の左の手は肩から振ぎとられた。右の手先もぐぢやぐぢやになつて、やつと二本の指が残つてゐるだけである。彼はこの二本の指を使つて根氣よくタイプライターをたいた。間もなく、ペンで書くよりも迅く且正確に書けるやうになつた。そして彼の名の署せられた立派な文章が、ぽつ／＼名高い雑誌や新聞に現れるやうになつた。

「あゝ、ベッカストリニ。」

世人は彼の名を見ると、すぐにかう言つた。この簡単な言葉のうちには、ベッカストリニの赫々たる勳功に對する讚

歎と、その不幸な運命に對する同情とが溢れてゐた。

一千九百十七年の五月、傷病兵に對する勳功表彰式がローマで行はれた。式は非常に盛大であつて、皇族を始め内閣諸大臣が悉くこれに列席した。

言ふまでもなく、ベッカストリニはその花形であつた。數ある傷病者のうちでも、ベッカストリニほど勇敢に働き、ベッカストリニほどひどい傷を被つたものは少ない。彼は最も名譽ある勳功者の一人として、その日厚く表彰されることになつてゐた。

式は癡兵院の内で行はれた。院内はいろくくの準備でた

いそう込みあつてゐた。役員たちはみんな興奮しきつて、紅い顔に眼を光らしながら、忙しくあちらこちらに走りまはつてゐた。

ベッカストリニは式場に出るために、靜かに支度をした。きちんと身じまひをすますと、「さあ、これで支度が出来た。」と獨言をいつて、最後に靴をはかうとして、あたりを探つた。しかし靴は彼の手に觸れなかつた。彼は少しあわてて忙しく手を動かした。それでもやはり靴は見つからなかつた。そのうちに式の時刻はだんく迫つて來た。彼は氣をいらつて、しきりに從卒の名を呼續けた。どうしたものか、從卒はなかくやつて來なかつた。ベッカストリニは

困つた顔をして、黙り込んだ。

と、廊下に少年の聲がして、

「君、何か御用ですか。」

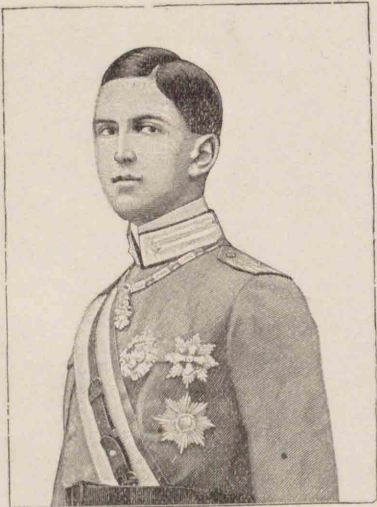
といふ。ベツカストリニは聲のする方に見えぬ眼を向けて、何氣なく、

「僕は靴をはきたいのですが――」。

と言つた。すると、少年はつか／＼とベツカストリニの側に歩み寄つた。そして、「では僕がはかせてあげませう。」と、まめまめしく靴をはかせた。そして紐を結びながら、「紐の加減はどうです。これでいかがです。」と言つてゐるところに、大勢の人が通りかゝつた。人々は驚いて叫んだ。

「殿下、こゝにいらつしやいましたか。」

あゝ、ベツカストリニの爲に靴の紐を結んだ少年こそ、伊太利の皇太子殿下であつたのである。それを知つた時のベ



皇太子 - 伊太利

ツカストリニの驚愕と感激とは、どうであつたらう。やがて式が始つた。多くの傷病兵は熱意の籠つた表彰の辭と共に、勳章を授けられた。ベツカストリ

ニは特に高級の勳章を授けられた。その勳章が枯木の枝のやうな彼の二本の指にかけられた時、さや／＼と衣ずれ



后太皇タリゲルマ

の音がして、誰やら彼のそばに歩み寄つた。彼はそのしとやかな足音と、あたりの物々しいけはひとで、位高い女性がお出でになつたことを感じた。と、一人のものがマルゲリタ皇太后陛下であると注意してくれた。ベツカストリニは電氣に撃たれたやうに、肅然として身を正した。皇太后陛下は静かに仰せられた。

「あなたの事はのこらず聞いてゐます。あなたが新聞や雑誌に發表された文章もみな読んでゐます。聞けば、そ

の手で非常にうまくタイプライターを打たれるさうですが、今日晴の場所で打つて見せて下さいませんか。」
やがてタイプライターがベツカストリニの前に運ばれた。皇太后陛下はベツカストリニの後に立つて、その肩に片手をかけながら、肩越しに紙面を覗きこんでゐられた。ベツカストリニは機械に二本の指をかけながら、暫く身動きもしなかつた。
「どんな文字が現れるだらう。」
満場の人々はかう思つて、固唾を呑んで控へてゐた。寂として聲なき中に、ベツカストリニは興奮しつゝ、打つべき文句も容易に頭の中に浮んで來ないやうであつた。

見よ、二本の指は忽ち稻妻のやうに疾く動き出して、かつかつの音が續けざまに場内の空氣をふるはせた。人々は覺えず目を見はつた。見る間に紙の上には、

「陛下よ、臣は陛下の殊恩に感泣す。」

といふ文字が現れた。打ちをはると、ベッカストリニの空洞のやうな兩の眼から、熱い涙がはらくとこぼれた。彼は黙々として涙に濡れた顔を紙の上に伏せた。すゝり泣の聲がそこゝに起つた。〔童話の研究〕

二四 湖畔の秋

田山花袋

午後四時過、汽車は明るい大きな湖水を前にして、例の義仲

田山花袋
名は録彌
文學者
群馬縣館林町生
昭和五年歿
年六十
義仲
木曾冠者源義仲

粟津の原

滋賀縣大津市の南にある松原

石山

滋賀縣滋賀郡石山町

比叡山

京都市の東北方近江山城兩國に跨る名山

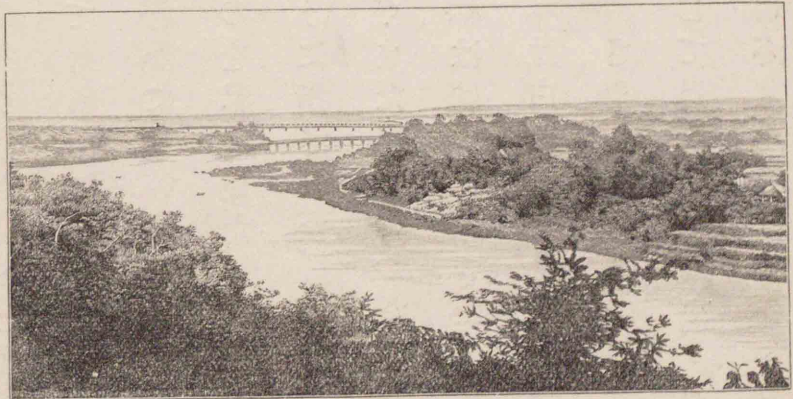
瀬田川

琵琶湖に發し西南に流れて山城に入り宇治川となる

の古戰場である粟津の原を、次第に石山の停車場へと近寄つて行つた。流石は秋だ、いつ通つても、いやにどんよりとさびてゐる湖水が、今日は際立つて靜かに、碧い空がくつきりと捺すやうにそこに映つてゐるのを私は見た。比叡山のまるい姿も、さながら手に取るやうに指された。石山の停車場はちよつと停つただけで、すぐまた出て行つた。ふと私の眼に映つたものがあつた。私ははつと思つた。私は汽車の左側に腰をかけてゐた。私は白い壁を見た。一面に岸に並んでゐる白い壁を見た。さうして、そこに何とも言はれない美しさで夕日が反映してゐるのを見た。つづいて湖から流れ落ちてゐる瀬田川が見え、そこにかゝつ

石山の寺
石山町にある眞
言宗の名刹
西國巡禮十三番
の札所

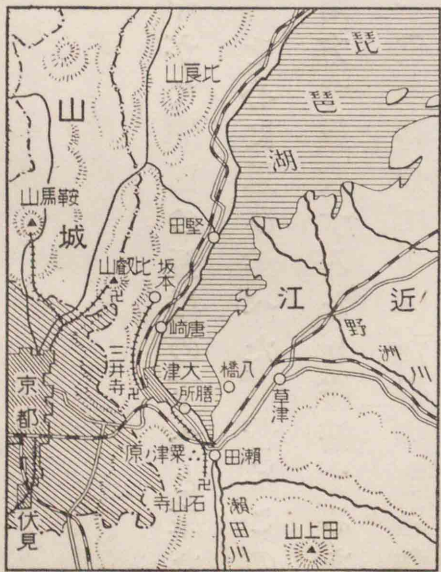
てゐる瀬田の橋が見え、石山の寺を
その中に持つてゐる低い平たい丘
陵が見えた。さうして、それらのも
のは、すべて美しく夕日の影の中
ちらくちらと輝くやうに思はれた。
川に浮んだ帆も、舟も、何も、か
も、白
い壁のくつきりと照されたさまが、
中にも殊に鮮かに見えた岸には、川
柳がやはり夕日の明るい光線の中
に並んでゐた。
「ほあ、なるほど。」



石山よと瀬田橋を望む

八景
石山秋月
瀬田夕照
矢橋歸帆
粟津晴嵐
三井晚鐘
唐崎夜雨
堅田落雁
比良暮雪

私は、かう思はずにはゐられなかつた。だから、一度や二度
見て軽率に判断してしまふことは出来ない。昔の人は何
遍も何遍も見ただで、それで瀬田の夕照といふ名勝を八景
の中の一つにしたのだ。
これと同じ美しさを持
つた夕照のさまを、昔の
人はちやんと見てゐた
のだ。それを曾ては、ど
うしてこんなところが
好いのだらう。瀬田の夕照などといふけれど、ちつとも夕
日などの好ささうなところではないとも思つたことのある



琵琶湖附近

るのは、古人に對して恥かしい至である。かう思つてゐる中に、汽車は早くもその瀬田の長橋に並んだ鐵橋を轟々と渡つて行つた。

大津
滋賀縣大津市
草津
滋賀縣栗太郡草津町

私たちを載せた汽船は、やがて瀬田の長橋の下へと來た。その時、私はいろくゝの事を心に思ひ浮べた。昔は、この橋は、大津の方と草津領と兩方で架設するなり、修繕するなりしたものらしい。私は子供の時分にきいた俗謠を思ひ出した。

大津の鍛冶屋と、
草津の鍛冶屋と、

煙草も吸はねで、

とつちん、かつちん。

水にうつるは、

およいよいの

膳所ヂソの城。

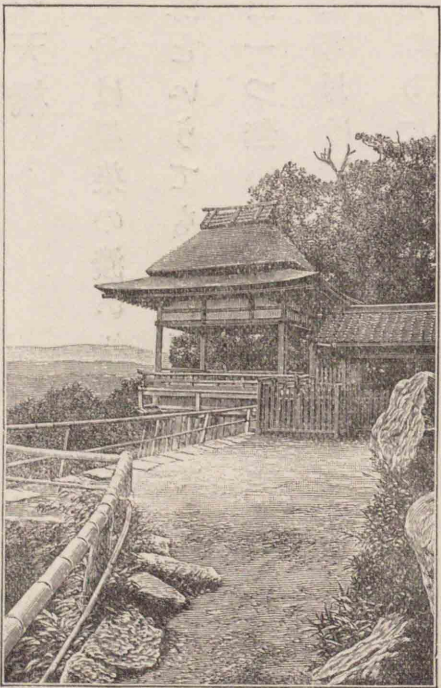
膳所
滋賀縣大津市の
東南に接する市
街
本多氏六萬石の
舊城下

鍛冶屋だから、或は此の橋のかけかへ乃至修繕の時の謠ではなかつたかも知れない。しかし、大津と草津と膳所とを三つ並べたところに、たしかに橋を含んでゐるやうな氣が私はしてゐた。膳所の城が、さつき汽船で通つて來たところにあつて、それが湖水にその影を涵して動いてゐるさまが、それとはつきり手に取るやうに見えた。

私はじつと其の方を眺めた。汽船は動搖しない程度で、静かに動いて行つた。涼し過ぎる程、風は汽船の中を吹いてとほつた。遊覽船らしい、客を載せた小舟が、ふはくと波に漂ふやうにして動いて行くのが指された。水郷らしい氣分——蘆荻が岸に生えてゐたり、白楊はくようが並んで茂つてゐたり、さうかと思ふと、水鳥が思ひもかけず蘆荻の中からばたばたと羽音を立てつゝ、飛んで行つたり、いかにも水郷として恥かしくないといふやうな心持——があたりに漲つて來たが、しかも、それは長くは續かず、やがて汽船は石山の人家のある處へ進んで行つた。岸に並んだ旅舎、長く連つた欄干、そこに立つてゐる浴衣がけの客、かと思ふと、岸に立

つて、または石を傳つて頻に綸を垂れてゐるものなどは私は目にした。

石山は、近江八景
 の中では幽邃の
 方だけれども、長
 くとどまつてゐ
 ようとする心持
 を起させるとこ



石山寺

田上山
 瀬田川の左岸に
 ある山々の總稱

ろでもなかつた。山門から本堂へ這入つて行く路の兩側に楓樹の多かつたことと、本堂の建物がいかにも古雅で、感じが静かであつたことと、田上山たなかみの赤ちやけた山脈に面し

月見臺
觀月亭とも齋
亭ともいふ
石山寺多寶塔の
北にある

天橋
天橋立
京都府丹後國與
謝海の中央に突
出してゐる砂洲
長さ約四軒
日本三景の一
徳富健次郎
號は蘆花
文學者
明治元年肥後國
水俣生
昭和二年歿
年六十
切戸
京都府與謝郡吉
津村大字文殊と
天橋立の長洲と
の間の小海峡
こゝの渡を文殊
の渡といふ

て立つた月見臺の位置がちよつと世離れてゐたこととが、
私の心を惹いたばかりであつた。(水郷めぐり)

二五 月の天橋

徳富健次郎

ぎい、と艚が響いて、舟は墨染の濃い松影から、白々とした月
下の海に出た。海というても浅い洲の水である。何とい
ふ好い月夜か。雲一つ無い空にのみ照るかと思へば、水中
に天あつて、そこにも月は壁の如く光つてゐる。何といふ
清い水だらう。月明りにも、水底の砂が分明に數へられる。
こゝは橋立切戸きりこの渡か。若しくは天河をいま渡りつゝあ
るのではあるまいか。船頭よ、ゆるやかに舟をやつてくれ。

もつと徐かにやつてくれ。しかし、如何程徐かに舟をやつ
ても、彼岸は近い。舟はもうするくくと天橋の渚に着いて
しまふた。

舟からあがつて踏む白砂は、もう天橋立である。こゝらは
植ゑついで間もないと見え、松は稚木で、疎らである。月光
に雪と輝く砂を踏んで、だんくゝ奥へ入つて往く。歩むに
連れて、松影はだんくゝ深くなり、はては月の光よりも松の
影が多くなつた。

何といふ明るい月だらう。仰げば松の一葉々々が白金の
ピンを數ふる如く讀まれ、俯く砂にはまた一葉々々の影が
黒く鮮かに讀まれる。

ピン
Pin

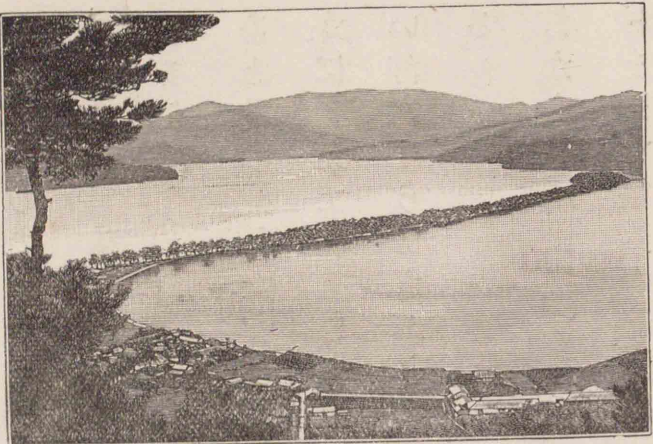
與謝の海
京都府丹後國與謝郡の内灣
天橋立によつて宮津灣と境してゐる
古くは宮津灣與謝海を總稱して與謝海といつた

松間の路の曲る處に來た。余は松の幹に倚つて立つた。ひつそりした天橋立に人籟絶えて唯何處からともなく、さあざあといふ響がする。松風か。否、足下の松影は濃い墨もて描いた様に少しも動かぬ。音響は與謝の海が天橋一里の白砂を舐むる響に外ならぬのである。其の響に牽かれて汀に出て見る。其處に約二間ばかりの花崗石のベンチがある腰をかける。月下にほの白く眠る與謝の海、其の懷には壁



天橋立附近

宮津
京都府與謝郡宮津町



天橋立

の様な月を抱き、寐息かとはかりざぶり又ざぶりと白砂にこぼるゝ漣は、まるで眞珠をこぼすやう。海の南に、半圓形の山根に沿うて紅寶石や琥珀の光が點々と灣を縁どつてゐるのは、彼は宮津の町である。ふと此方の海の上に、不思議な物が現れた。晃々とした明珠の幾段にも列んだ老大な横長いものである。龍宮城の出現——と見る間に、それは宮津の方へ動いて行く。龍宮城が

移動する、と見たは、それは今日の最終の連絡船が宮津を指して行くのであつた。やゝ暫く其の行方を見送る。龍宮城はあの宮津灣頭百千の龍燈晃めく邊にびたりと着いてしまつた。

あとは唯慰したやうな與謝の海。照りまさる月の空と靜かに相見て相抱き、一里の松原枝も鳴らさぬ天の橋立の長い汀にそうて、ざぶり又ざぶりと漣がさゝめくばかりである。

汀から松原に戻つて、奥へくと砂路を歩む。さくくと砂を踏む足音の絶間に、波のさゝめきが慕うて來る。幽かに蟲の音がする。松影は益々深くなつて、はては砂の上にこ

橋立明神
天橋立の中央部
にある一小祠
祭神は豊受大神

ぼるゝ月影がちらくと螢ほどに細く疎らになつた。と見ると、こゝにひつそりと鎮ります社がある。大方橋立明神といふのであらう。松影を浴びた其の宮に人影もない、人聲もない。燈明一つともつてゐない。

余はその松に倚りかゝつて、やゝ久しく立つた。

大分たつてからである、歩を返して松影から月に出て、砂路をぶらりくと又切戸の渡に來た。切戸の水は全く天河の如く美しい。汀に立つて向ふを見れば、眞黒い彼岸に唯一つ赤い灯が見える。文殊の渡守が小舎の灯である。

「おーおゝい。」

渡を呼ぶ余の聲が震へて天河を渡る前、余は月の天橋の端

に立つて、暫く其の灯を眺めてみた。(死の蔭に)

二六 明治天皇の御遺物を拜観して

笠井信一

笠井信一
當時の巖手縣知事
貴族院議員
駿河國生
昭和四年歿
年六十五
先月
大正二年一月

先月十七日宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰出されましたので、参内致しましたところが、特別の思召によつて權殿参拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後、一年間皇靈を祭らせられる宮中の御部屋でございます。それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜観致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。先帝には長く茲に在らせら

れて、徳教を御敷きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられる等、宏謨



明治天皇尊像
渡邊長男謹作

雄圖一にこの中で御定め遊ばされたのでございます。然らばどんなに御立派な御部屋かと申す

に、實に意外で、平常私共が参内の節、休息を許される御部屋の方が却て遙かに御立派である。餘り廣くない二間續きの御部屋で、檜の白木造ではあるが、別段の御裝飾も遊ばさ

れてない。御机も御椅子も實に御質素なものです。絨毯の如きは最初敷かれたまゝで、後には大分色も褪めて参りましたので、侍臣から御取換の儀を屢願ひ出ましたが、御許がなくて、遂に今日に至つたのださうでございます。

此の御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。その御部屋には、先帝が御學問所に於て御使用になつた御遺物の全部が其の儘に据置かれてございます。これは今上天皇陛下の大御心に出でさせられたる趣に拜承致しました。構造も方向も廣さも御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も昨年七月十三日即ち先帝最後の御當時のまゝに御備附になつてございました。床の間に

今上天皇
大正天皇

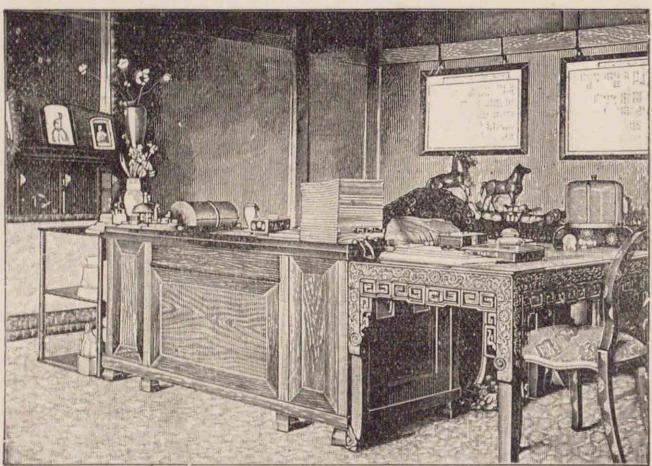
テーブル
Table
卓子

は其の當時の御軸物が掛けてあり、其の前方には御劍が數振横たはり、御机は中央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近するなどは思ひも寄らぬことでございますが、今回は特に御許を蒙つて、子細に拜觀する光榮を得ました。

まづ御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に焼痕がございます。是は先帝が御煙草を召上つていらつしやつたとき、臣下より政務の言上がありました。先帝には御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられた折、煙草が墜ちて此の焼痕がつくやうになつたのだと申すことでございます。さて此の焼痕の

あるテーブルの羅紗を御取換へ申し上げんがため、侍臣より幾度となく願ひ出ましたけれども、斷じて御許がなかつたとの御事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉徳の至と拜察し奉ります。

御硯箱は、明治二十年に鹿兒島縣から御取寄になつた竹製の品でございます。そのなかの筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひる物とかはららないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどに御使ひふるしに成り、墨も亦同様で、一寸位に磨りへらされた品でございます。鉄も亦同じく普通市場にある品で、其の傍に學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は、侍従の方が何かの調



明治大正文藝變化史に據る
明 治 大 正 文 藝 變 化 史 に 據 る
表 御 座 所

べに用ひたまふ其處に置忘れたのであらうと存じました。が、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと思つて、今更ながら御儉徳の高きに感激し、自ら顧みて慙愧に堪へませんでした。御椅子の下に獅子の毛皮が敷かれてございます。これは青山御所に御出で遊ばされた頃から久しく御使用になつたもので、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れるやうに

なりました。そこで侍臣より御取換を願ひ出ましたが「なに、これでよい」と仰せられて御許がない。せめて御修理を
と願ひ出て、やつと御許を得た。併し適當の皮がないことを
言上致しました處、何の皮でもよいとの思召であつたの
で、赤犬の皮を以て繼ぎ足したと申すことで、侍従が「此の邊
が犬の皮でございます」と説明して居られました。

其の傍にホワイトシャツを入れる白いボール箱やうのも
のが澤山に積重ねてございましたから「何に遊ばす物か」と
侍従に尋ねました處、やはりシャツの空箱であるが、書類を
入れるに便利であるとして、御手許に留置かせられたもので
あるとのことございました。

ホワイトシャツ

又、ワイシャツ

洋服の下に着るシャツ

ボール

Board
馬糞紙

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れて、表に主
務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後は別の
紙袋に入れて御下げになる。そして御不用になつた前の
紙袋は一枚たりとも御棄て遊ばさず、隨時御詠出の御製を
御認めになる御詠草に御用ひになりました。それを御側
の方が別紙に拜寫して御歌所に御廻し申したのださうで
ございます。實に天下の物は、用ひるに其の途を以てすれ
ば一として無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞召
されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用
遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、

詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は務めて御節約相成り、いさゝかにも冗費をば御省き遊ばしたと申す事でございます。一天萬乗の大君におはしましなから、禿びたる御筆を御用ひになり、破れたる敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか。皆是、節すべきを節して有用の事にのみ御用ひ遊ばすといふ大御心に外ならぬ事と存じます。さて、御次の間には、造花や彫刻や種々な物品が備へられてございました。これを拜見致しまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御獎勵の爲御持歸り、又は御買上げ遊ばされたもので、御裝飾の御目的とは考へられませぬ。それ故に、造

花の如きも格別のものでなく、何年前のものか、色も褪めはてて殆ど裝飾の用を爲さぬものまでそのまゝになつてございます。その他美術工藝品の如きも皆御獎勵の爲で、俗人の好みとは全く趣を異にしていらせられます。御製に、
千よろづの民と偕にも樂しむに

ます樂みはあらじとぞ思ふ

とございますが、實にこのやうな御樂みをお求め遊ばすため、先帝には長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は先帝の御蔭を以て隆々として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば、我等は長い間、聖

